



FUJIKO

鳳の眼
麗の章

・前置き,主な登場人物

・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、今までの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は`警備部暗躍係、別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人、リカは女性だけで構成された大手劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られていた。彼女は死と隣り合わせの日々を送り、葛藤しつつ、あらゆる危機や難事件に立ち向かうという使命を与えられたのであった。

・主な登場人物

リカ

本作の主人公、大手歌劇団の人気スターを務める一方、秘密警察の一員という裏の顔がある。恵まれた体格、類まれな美しさで多くのファンを湧かせてきた彼女であったが、歌劇団創立五十周年記念の年に退団発表することを決意する。

チエ

長年、歌劇団のトップスターを務める実力派の一人。ダイナミックなダンスに魅力がある。リカの一年先輩で彼女との共演は、ゴールデンコンビと評される。秘密警察の人間でもあり、常人離れの身体能力で危険な敵地へと乗り込む。

トヨコ

長い間、歌劇団で名脇役として活躍し、陰から劇団員を支え、仲間から慕われている。後輩のチエを妹のように可愛がり、トップに就任した時は自分のことのように喜んだ。裏の世界でも名が知られ、数々の危機を乗り越えた筋金入りの戦士でもある。

ユズミ

将来を期待される男役スターの一人であらゆる役を演じ分ける個性派の舞台人。アドリブとフリートークを得意とするお笑い担当でもある。時代劇マニアで有名な剣豪が使っていた刀を武器とする。

マユ

主席の成績で歌劇団に君臨するエリート。ダンスを得意とし、彼女が舞台に立てば一瞬で華やかに引き立つ。裏の世界では凄腕の狙撃手として名を広げている。彼女は退団を決め、新たなスタートに踏み出そうとしている。

エリ

大手歌劇団の舞台人として実力がありながら下積みが長く、遅咲きでトップスターとなり、トップ就任後の活動期間は平均より短かった。彼女は、リカが尊敬する先輩の一人で師と仰ぐほどである。裏稼業でリカと組むことになり、ある陰謀に立ち向かうこととなる。剣術の使い手でも

ある。

ミュ

現代的な容姿で勢いがある歌劇団トップスターの一人。外見はクールに見えるが内面は熱いものを秘めている。リカの一年後輩で、彼女を姉のように慕っている。裏稼業では頭脳派であらゆる難事件を解決している。

歌劇団理事長

半世紀続く歌劇団の伝統を守る、最高責任者。リカたち劇団員とは親子の関係のように親しく、退団するまで責任を持って面倒を見ている。

レジェンド四強

歌劇団の人気を支えた伝説のOG四名。表舞台でも絶大な人気を誇った人物であるが、長年、陰から日本国家を守った英雄でもある。今回、リカに演技指導をするため姿を現す。

安藤ユウ

秘密警察の捜査員の一人で、リカのパートナーでもある。リカに裏の情報を提供し、日々、犯罪組織に立ち向かっている。ちゃらい印象があり、リカの舞台を観劇することもしばしば。

雨宮シズク

突如、リカを尾行する謎の女性。

序章 二つの顔を持つ麗人

二〇一四年 三月某日

兵庫県神戸市の閑静な住宅街。そこは西洋の城を思わせる豪邸が密集していた。その住宅街には元外資系企業の社長で現在、政治家である石橋新次郎の自宅があった。彼は外出中であった。

深夜、石橋の屋敷に一人の女性が忍び込もうとしていた。彼女は警視庁「警備部暗躍係」に所属するリカであった。彼女は任務で石橋の家に侵入していた。

「...ゴソ」

リカは、忍び足で書斎がある部屋へと向かった。速やかに部屋に侵入すると彼女は何かを探していた。

「.....！」

リカは皮の手袋をしており、プロの泥棒のような手つきで部屋の辺りを物色して、机に置いてある最新OSのパソコンに注目した。電源を入れてすぐさま、あるデータを探し出そうとした。

そして、データを見つけ出した途端、リカは手持ちのフラッシュメモリーを取り出し、それにデータをコピーしようとしていた。作業は全て順調かと思われたが、もう彼女に危機が迫ろうとしていた。

「♪～！」

その時、警報装置が作動して、屋敷内で警報ベルが鳴り響いた。

「ちっ」

リカは舌打ちして落ち着かない様子で、データがコピーするのを待った。彼女が忍び込んだ書斎には、既に警備員が駆け付けており包囲されていた。

「ここを開けなさい！」

警備員は鍵を掛けられたドアを何度かノックしたが、反応がないため合鍵で開けようとしていた。

しかし、その時...

「バン！」

突如ドアが勢いよく開き、その中からリカが飛び出してきたのであった。

「...おっとごめんよ～」

警備員は、体当たりのショックで気絶してしまい、その隙にリカは屋敷から逃げ出そうとした。

「...！！」

しかし、また警備員がリカの前にわんさかと現れた。

「...簡単には逃がしてくれないか...」

リカは、上着の胸内側に手を突っ込んで、装備している銃、グロック 26 を抜いた。

「！！」

駆けつけた警備員は怯んだが、リカは構えた銃を警備員の方に向けなかった。彼女は窓の方に照準を合わせ、連射した。

「...何...！！？」

銃弾が命中して窓ガラスが破られ、破片が飛び散り、警備員が啞然とする中、リカは窓ガラスを蹴破って、そこから飛び降りようとした。そこは二階であった。警備員たちが飛び降りた場所を確認しようと見下ろすが、既にそこにはリカの姿はなかった。リカは、屋敷の高い塀を飛び越えて無事脱出したのであった。

リカはフラッシュメモリーを手に取り、安堵の表情を浮かべてその場を去って行った。

一仕事終えたりカは、夜の住宅街を颯爽と歩いていた。その夜は少々冷え込むが、晴れていて、月光が彼女の姿をスポットライトのように照らしていた。リカはレザースーツを着ており、髪型はセミショートのオールバックで金髪であった。その時の彼女は、神々しく何とも言えない色気が漂っていた。

しばらく歩いていると、一台の車が停まっており、リカはすぐさまその車の助手席に乗り込んだ。

「...予定通りだな」

運転席には、ダークスーツを身に纏った男性が座っていた。彼はリカと同僚であった。

「...思ったより警備は厳重だったわ」

「...帰って来たら顔色が変わるだろうな.....例のブツは？」

「...お望み通り、これよ...」

同僚の男は、リカからフラッシュメモリーを手渡されて、手持ちのノートパソコンに挿し込んで、中身を確認しようとした。

「.....よし、いいぞ、外国人マフィアとの不正取引の現場がばっちり写っている...他にも政界や外交に影響する情報が満載だ...ご苦労さん...」

「.....そっちの方の捜査は順調なの？」

「...ああ、内部告発する者が現れてな...これで奴も終わりだ...」

「一件落着ね...」

「ああ、すまなかったな、家宅捜索の許可が下りれば、お前の手を借りずに済んだんだが...明日の予定は？」

「...取材と一週間後にある式祭典の打ち合わせよ...」

リカは、同僚の男と目を合わせず、素っ気ない態度で答えた。

「そうか...よかったのか？今は特に忙しいんじゃないのか？」

同僚の男は、リカを少し気に掛けていた。

「...何も心配要らないわ...それにあの政治家の顔が嫌いね...すぐに片付けたかったの」

「...そうか、とりあえずこの件は終わった...あとは舞台に集中してくれ...そっちの仕事は楽しいか？」

「...まあね、こっちの仕事の方が長いからね...奥が深いから油断出来ないわね...」

「...今年は五十周年だろ...お前は記念すべき年にトップスターになったわけだ...」

「どっぴりと歌劇団の世界にハマっているわね...」

「...ああ、休暇に立ち見券を買って、観に行くほどだ...」

「.....五十周年イベントにも来る気ね？」

「格安チケットとかないのか？」

「うちは、そういうサービスを行っておりません、それにチケット入手は困難よ...どうしても観たければダフ屋から買い取れば...？」

「...つれないな～、まあいいか、今はテレビやネットで観れるからな～」

「...生の舞台は、直接観に行った方がいいわよ...まあ好きにすればいいけど...」

二人の会話はさほど弾まず、別れの時間が近づいていた。

「今日は休みのようだが...夜の予定は？」

「...何もないわ、帰ったら風呂入って寝るだけよ」

リカは不機嫌そうに答えた。リカが車から降りた後、同僚が運転する車は静かに彼女の前から去っていった。

彼女もまた住宅街から姿を消し、夜が更けていった。そして、数日が過ぎようとしていた。

警備部暗躍係に属するリカの表の顔は、舞台女優で、ある劇団の出身であった。

彼女が所属する劇団は、関西地区を本拠地に行っている伝統ある歌劇団であった。特徴として、未婚の女性だけで構成されており、長年の人気を博し、全国で上演されている。

歌劇団員総数千人以上。複数の班に分担され、ベテランが集う班も存在する。日本を代表するエンターテインメントの殿堂として、有名な劇団であるが魅力は様々である。

女性だけで構成された劇団のため、男性役も女性が演じており、当初は娘役（女役）の方に人気があったが、男役が風格を現しファンが増加することとなった。

何と言っても、歌劇団の頂点ともいえる主演男役、俗にいうトップスターは、一握りの選ばれた劇団員しかかなれないエリートとされる。

当初、日本を舞台にした作品が多かったが、ジャンルの幅を広げていき、世界の歴史的な大事件、喜劇、映画、小説を題材にして、さらには神話や民話、御伽話、架空のオリジナル作品など多岐にわたる。

歌劇団に入団する資格として、専属の音楽学校に入学、卒業する必要がある、入学倍率は毎年三十倍以上と名門大学に入学することより困難とされている。

戦前から長年上演され、多くの輝かしいスターが誕生し、二〇一四年で、記念すべき五十周年を迎える。それに向けて、多くの催し物や公演が計画されようとしていた。

リカは、五十周年に在団しているトップスターの一人として現在活躍している。彼女が所属している班は、複数の班の中で一番新しく、特徴は長身の男役スターが多く、劇団随一の身長を誇る。作品は新作が多いが、過去の再演ものなどにも充分に対応出来る。

リカは、歌劇団に十五年在籍し、自分で不器用だと言い張り、色々と経験を積み重ねて人気を博し、念願叶ってトップスターの座についたのであった。

こうして、表の世界では夢を売る華やかな仕事をして、裏の世界では危険と隣り合わせの仕事をしていた。彼女は、上手く二つの仕事を両立しているかと思われたが、ここである問題が起ころうとしたのであった。

第一話 告白×絆

二〇一三年 クリスマス

今日はクリスマスで街中は賑わっているが、今のリカには縁がなく、特に関係のないものであった。彼女は、長年人気を誇る作品の東京公演を無事終えて、休む暇もなく、本拠地の歌劇団大劇場へと急いで帰還した。

彼女は、劇団の最高責任者が居る部屋へ足を運んだ。室内には、理事長とリカの二人きりであった。その日の彼女の服装は、黒と白で統一され、髪型は黒髪のショートヘアであった。リカは黒のコートを脱ぎ、ソファにそっと座った。

「.....私も忙しい...出来れば手短かに話してほしい...」

理事長がソファに深く座り込み、リカに問いかけた。

「...突然申し訳ありません...大事な話なので急に思い立ちまして...」

「...まあいいだろう、君とこうして会うのは久しぶりだな...一度話してみたかった...今回の公演、評判がいい...君に任せて正解だった...」

理事長は、リカを大いに褒めたたえた。

「...ありがとうございます、出来る限りのことはさせてもらいました...」

リカは、頭を下げて礼を述べた。

「これからの活躍を楽しみにしている...それで用件は？」

「.....」

その時、リカは若干緊張している様子であった。

「.....実は折り入って話したいことが...伝えたいことがあるのです...」

リカは重い口を開き、用件を話そうとしていた。

「聞こうじゃないか...」

「.....そろそろ退団させてもらおうかと思ひまして...！」

「...！！？」

普段冷静な理事長も驚きが隠せず、表情が崩れた。

「...それは...本気で言っているのか？」

「ええ、本気です...」

「.....辞める理由が訊きたいものだが...」

「...はい、トップになった時点でゴールを意識し始めました...そして、立て続けに大作の出演が決まり、究極の男役に出会った...私はその男役に今まで培ってきた男役美学の全てを注ごうと思ひました...」

「.....成程、真面目で独創的な君らしい発想だ...他に言いたいことは？」

「...そうですね...あと言えることは、共演している仲間たちが頼もしく思えたことでしょうか...班替えでトップスターになった私を快く迎えてくれたことには感謝しています...だから彼女たちに今の班を任せられるなど思ったので退団を決意しました...」

「...そうか、それなら仕方ないが.....まさか来年に辞めるつもりじゃないだろうな？もう既に、二人のベテラントップの退団が決まっている...それで実力派の君まで辞めてもらっては困る...！」

理事長は、焦りの表情を浮かべながらリカを問い詰めた。

「...いえ、そんな勝手なことはしません...来年は記念すべき五十周年です...もうスケジュールはびっしり埋まっていますからね...」

「ああ、来年に辞めることは難しいと思うが、それでも構わないのか...？」

「...別に構いません...落ち着いた時に会見を開くことが出来ればいいんですが...」

「...そのことは心配するな...ちゃんと調整しよう...式祭典が終わった後でもいいだろう？」

「ええ、お任せます」

「.....本当に急なことで驚いた...」

「コンコン」

その時、扉をノックする音が聴こえ、一人の社員が入室した。

「...そろそろお時間です、ご準備していただけますか？」

「...分かった、ちょっと待っていてくれたまえ...」

理事長は部下を待たせ、出掛ける準備をしながらリカと話そうとした。

「...悪いがじっくり話せる時間がない...近いうちにもう一度会わないか...? こんな所ではなくゆっくりと食事が出来る場所で...上層部の人間も集めたいと思うんだが...」

「分かりました...そちらのご都合に合わせてます...お気軽にご連絡を...」

「...ああ、ではとりあえず今回はここまでだ...失礼させてもらう...」

「お忙しい中、ありがとうございます！」

用が済んだりカは、退室しようとしたが、理事長はふと何か思い出し、彼女を呼び止めようとした。

「...ところで、もう一つの職場の人間には辞めることを伝えたのか？」

「...いいえ、これから伝えるつもりです...こっちの方が先決なので伺ったのですが...」

「そうか...劇団を辞めるとなれば規則上、理解はしているんだろうな...」

「...ええ、退団すれば裏の世界から手を引くこととなる...重々承知しています...」

その時、リカは、神妙な面持ちで返答した。

「それなら結構...もう下がっていいぞ...」

「失礼します...！」

リカは深々と頭を下げて退室した。二人は、ようやく重い空気から解放されたのであった。

用を済ませたリカは、少し稽古場を覗こうと、エレベーターへと乗り込んだ。稽古場のあるフロアで降りると、近くの休憩場所に一人劇団員が座っていた。

「...ああ、どうも」

「...おお、久しぶりやな...」

その劇団員はリカがよく知っている人物であった。

本名はチエ。大阪出身。彼女は一班のトップスターで、新人の頃から絶大な人気があった。実力が認められ、ファンの期待に応えて、班替えなしでトップスターに就任した。トップ就任してから五年が経ち、トップ就任が決まってから短期間（三年以内）で退団する劇団員が多い中、最長期間を務めている。そんな彼女は、リカの一年先輩である。

リカは、チエが在籍している劇団班に在籍した時があり、彼女と一緒に舞台に立った経験があり、それがきっかけで親しい仲となった。当時、二人は息の合った名コンビとして人気があった。リカのトップ就任が決まった時、チエは大いに喜んだ。この二人が歌劇団の伝統を支えている一員ということは言うまでもない。

「チエさん、今稽古中でしょうか？」

「...ああ、そうや、もう年越したら始まるからな...ここでイメージトレーニングしとったんや...」

「...ついに始まるんですね...私も新人の頃、よくここでイメトレしてたな~」

リカは目を閉じ、昔の自分のことを色々と思い出していた。

「...それにしてもどないしたんや？東京公演は終わったやろ？何でこっちに居てるんや？」

チエは、素朴な疑問を訊ねた。

「...ええ、実はちょっと大事な用がありまして、急いで帰ってきました...」

「...大事な用ね～かなり深刻そうやな...？」

チエは、リカの様子を窺っていた。

「...分かります？ここだけの話なんです...実は.....もう辞めようかと...」

リカは、チエに退団することを素直に話そうとした。リカの話に興味を持ったチエは、休憩場所の自販機で缶コーヒーを買おうとした。

「ブラックでもええか？」

「はい、大丈夫です、ありがとうございます！」

チエは、リカに缶コーヒー一本を奢った。彼女は、リカの退団にさほど驚かなかった。それは同業者からしてみれば、誰もが通る道だからである。

「...そうか、リカもついに辞めるか...」

「ええ、このことはまだ理事長にしか伝えていません...チエさんで二人目です...」

「...あんたらしい退き方やな...確かにあんたが演じた主人公は、実に完成度が高かった...私の班に居た時とは比べ物にならないくらい成長したな...感動したわ！」

「ありがとうございます！」

リカはチエに褒めちぎられ、素直に喜んで口元を緩めた。

「.....というより、その前から成長したことを実感したんやけどな.....」

「...ピンポン」

その時、リカたちが居るフロアに一基のエレベーターが停止した。

「...あれ？珍しい！」

扉が開いた途端、声量のある声がりカたちに届いた。声の主は、劇団員の一人であった。名はユズミ。将来を期待される男役スターの一人で、あらゆる役を演じ分ける個性派の舞台人

。アドリブとフリートークを得意とするお笑い担当でもある。

「やあ、久しぶりだね～今年一度会ったくらいかな...？」

「そうですね、相変わらずお綺麗で～」

「そんなお世辞いらないよ...」

「...それにしても豪華ですね...よっ歌劇団ゴールデンコンビ！」

「何アホなこと言うてんねん...」

チエは、ユズミの発言に呆れ顔であった。

「...しかし、何でまたこっちに居るんですか？」

「...ちよっとこっちに用事があるね...予定より早く済んだからあなたたちの稽古場でも覗いておこうかと思って...他の班の稽古場見るの好きなの...」

「へえ～相変わらず勉強熱心ですね～早よ来て下さいよ、生徒の皆びっくりしますよ！」

「今、大事な話をしてるんや、もうちよっと話してから戻るから...早よ行き、演出家の先生待ってるで～」

「分かりましたよ.....ほな、リカさん、待ってますんで～！」

ユズミは、軽やかなステップで稽古場へと向かった。

「...元気な子だね～」

リカは、ユズミのことに関して少々苦笑いであった。

「あのエネルギーを舞台にぶつけてほしいんやけどな...」

「...彼女、成長してるじゃないですか...この前、共演したドラマで思いました...」

「...確かに演技力はピカイチだけど、それだけでは上に行くのは難しいで...歌もダンスもまだま

だや...体の線が細いからな～彼女には何か決め手になるものが必要や...もうイチから鍛え直そう
と思ってるけど...」

チエは、日々後輩の能力を細かく分析していた。トップスターになれば当然の仕事である。

「スパルタだね～」

「...あんたこそ後輩には厳しい方やろ...私はまだ辞めるわけにはいかないんでね...可愛い後輩の
面倒を見ないといけない...まだ頼りなさがあるから、そこを直して行かないと...！」

「私はチエさん程、教育熱心じゃないけど、教えられることは全て教えたわ...これで満足し
て辞められるわけですよ...」

「...世代交代か、時間が流れるのは早いな...新人の頃を昨日のここのように思い出すわ...世話
になった上級生や同期は居なくなっていくし...あんたが班替えした時もはつきり覚えて.....
...ああ、そうや！」

チエは、何かを思い出したようであった。

「どうしたの？チエさん...」

「...ユズミが乱入してきたから話が横道に逸れたんや...あんたが成長したのを実感したのはつ
い最近やないってことや...それは春頃にやった特別公演の時や！」

「...ああ、あの時の...あれ稽古期間短かったから大変でしたよね？」

リカは、辛い経験を笑いながら話していた。

「ほんまにそやで...結構楽しかったけど...久々に共演して思ったわ...立派になったって...また一
緒に仕事がしたいと思ったわ...」

「今日は随分褒めますね～」

「私は正直やからな...あんたが辞めるって言い出すから、余計喋りたくなかったわ...」

「...本当にお世話になりました」

「その台詞はまだ早いやろ...すぐに辞めるわけやないやろ？」

「ええ、来年の出演作品も決まってるし、スケジュールはぎっしりですしね...五十周年の式祭典もあるし...」

「それは良かった...来年が楽しみやわ～」

「そうですね...」

「...それにしても...もうあんたとどれくらいの付き合いになるかな～？」

「...ほんと、どれくらい経つんですかね～？」

リカたちは同じような姿勢で天井を見上げて、ふと一緒に居た頃を思い出した。

それは、リカとチエが実力派若手として注目された大事な時期であった。

その頃、チエはエリートの道を順調に辿って行き、驚きの早さで歌劇団のトップの座を手にした。

リカは彼女を支えるため、若手ホープから二番手スターとして出世していた。さらには、世代交代で班は一新され、チエの主演お披露目公演を控えていた。しかしその矢先、リカたちに重大な任務が待ち受けていた。

ある日、リカ、チエ、ユズミなど劇団員数人が東京劇場の楽屋部屋に呼び出された。部屋には、一人のスーツ姿の男性が後ろに手を組んで、彼女たちを待っていた。

「よく来てくれた、君たちに頼みたいことがある...」

リカたちは、男性の話を聴こうと、囲むようにして綺麗に整列した。

「...かなり重要な任務ですか？」

まずチエが口を開き、男に率直な質問をした。

「ああ、緊急を要する、大体我々の仕事はそうだが...」

男は公安の職員で、裏の世界で秘密警察として、活動する劇団員たちに指令を出そうとしていた。

「何でも引き受けますが...」

リカは、冷静に男の目を見て受け入れた。

「...頼もしいな、では指令内容を話そう、実はここ数ヶ月、国内に潜伏している海外の過激派集団を追っていたんだが、捜査員が囚われの身になってしまった、奴らの要求は介入を辞め、速やかに捜査員を撤退させること...猶予はあと一日、要求に応じない場合、捕虜の捜査員は殺され、テロが実行される...何としても救出せねば...救出と同時にテロ組織の撲滅を命じる...！」

男は、任務内容を説明しながら囚われた捜査員のリストや過激派集団の資料をリカたちに手渡した。

「私たちに全て任せて大丈夫ですか？」

チエは、若干心配そうな声で男に訊ねた。

「ああ、他に手が空いている者が居なかったんで、緊急で君たちを招集した...特に質問がなければ早速現場に向かってもらう、準備は整っていて、いつでも出発出来るぞ」

リカたちは、命令に従って現場へと急行した。

東京近郊 旧市街地

日は沈み、武装したりカたちは、暗闇に紛れて標的が潜んでいる場所に接近して行った。リカはノートパソコンを取り出し、ある映像を確認した。

「...数時間ごとにネットの無料動画サイトで囚われた捜査員の様子が映し出されています...かなり衰弱しているようですね...」

「...じっくりと作戦を考えている暇はないな...ここは強引やけど、強行突破で行くしか手はないか...捕虜の命を最優先に...勿論、私らも無事に生還する...！」

今回の任務の指揮をとるのは、チエ率いる劇団班の実力派劇団員の一人で、名はトヨコ。

長年、歌劇団で名脇役として活躍し、陰から仲間を支え、慕われている。後輩のチエを妹のように可愛がり、トップに就任した時は、自分のことのように喜んだ。裏の世界でも名が知られ

、数々の危機を乗り越えた筋金入りの戦士である。

「...チエさんのお披露目公演に休演者を出すわけにはいきませんからね...」

リカは、冗談交じりにチエに話し掛けた。

「...あんたはこうやって群れて、任務に就いた経験がないやろう？うちは群れで行動するのがお家芸やからな...」

「...何度かありますよ、歌劇団の先輩と合同捜査をしたことが...男役で結成したスペシャルユニットに扮してね...」

「...成程、あれは人気の的やったな～」

「...あ～いいな～！私、リカさんが入ったユニットに憧れてるんです～♪」

「...ありがとう」

ユズミは、リカとチエの会話に食いつき、胸をときめかしていた。リカは愛想笑いをして、ユズミに礼を言った。

「...いらん雑談は終いや、そろそろ乗り込もうか...リカ、頼りにしてるで！」

チエは、リカに熱い眼差しを向けた。他のメンバーも期待に応えようと、気合を入れていた。

過激派集団は、市街地中央に位置する十二階の廃墟施設を隠れ家にしていた。各フロアには武装隊員が見張っており、警備は厳重であった。人数はおよそ八十人、捕虜となった捜査員は、最上階に拘束されていた。

「...よし、私らは裏手に回るからチエたちは正面から突入頼むわ...」

「...分かりました、お願いします！」

チエのチームとトヨコのチーム、二手に分かれて潜入を試みた。リカはチエの方についた。

一階エントランスには武装隊員はおらず、エレベーターは逃げ口を塞ぐため、チエ率いるチームは階段を駆け登った。

「...やたら静かやけど、相手は気づいてんのかな...？」

「.....そりゃそうでしょ、殺気をビンビン感じますよ～」

「...あんたは敏感やな～やっぱハイテク機器に頼りすぎたらあかんな...」

三階まで辿り着くと、リカたちは気配を感じて警戒した。

「.....散れ！」

「...ドガガガガガガ...ドンドン...」

チエの掛け声とともに銃声が鳴り響き、施設内は一気に戦場になった。

最上階にいるリーダー格にリカたちの情報が入り、全隊員に的確な指示を出した。

また、捕虜を引っ張り出して来て銃を突きつけた。

敵を蹴散らしていくリカたちであったが、敵の数が多く、なかなか上に進むことが出来なかった。

「...ちっ、これではキリがない...！無駄な時間を過ごしているだけ...どうすれば...！」

「...もうそろそろ派手にいこか...リカは私について来て...後のメンバーは援護を...！」

劇団員は、チエの指示に頷いて行動に移ろうとした。

チエは、物陰に隠れて分厚い素材の手袋を装着していた。

「...本番はこれからや」

そうチエが呟くと、手袋を装着した手を握り拳にして、両拳をそのまま強く擦りつけた。

「.....ボツ」

すると、チエの拳が炎に包まれた。彼女の装着した手袋は、マッチ棒のように摩擦を与えると

その時、爆発でリーダー格たちが居る部屋の扉が吹き飛ばされた。見張りの戦闘員も巻き込まれ、黒焦げで横たわる部下の姿を見て、リーダー格は、血の気が引いた。

「...やっと着いた、手間かけさせんなよ」

煙と粉塵が舞う中、潜入したチエとリカが颯爽と現れた。

「□○×▽？\$...！」

過激派集団は、中東の言語で騒ぎだし、リカたちは耳障りに思い、無視して捕虜救出に集中した。

「%&#+¥！！！！」

リーダー格が捕虜に銃を近づけて脅す中、リカたちは怖気づくことなく、じわりじわりと無言のまま近づいて距離を詰めた。

「.....チャンスは一瞬.....」

リカたちは一定の距離を保ち、自分のタイミングで迫ろうとしていた。お互い慎重に行動していき、運命の時が訪れようとしたが、そこに思いがけないことが起ころうとしていた。

「.....バゴオオオオオオ！」

「...？」

その時、突如天井が崩れていき、その中からトヨコたちが現れた。奇襲に過激派集団は動揺し、思うように体が動かず、トヨコたちの手により倒されていった。焦ったリーダー格は、捕虜の頭に照準を合わせて引き金を引こうとした。

「...ドン！！！！」

「.....が.....あ...！」

その時、間一髪でリカがリーダー格の銃を弾き、処刑は阻止された。

「.....これにて一件落着かな～」

チエに出番はなく、彼女は少しまらなそうな表情を浮かべた。

「...一か八かの作戦だったけど上手くいった方やね...」

「...ほんと助かりました、さすが慣れてらっしゃる！」

チエは、トヨコの働きに感謝の気持ちを述べた。

「...さて捕虜も無事救出したし、迎えを待ちましょうか」

任務を遂行した劇団員たちは、表情を緩めて気が抜けていた。

「.....！」

しかし、負傷したリーダー格は、意識が朦朧とする中、まだ戦意を失っていなかった。彼は、力を振り縛って、隠し持っていた小銃を取り出し、利き手じゃない方の手でその銃を握った。背を向けたチエたちは、狙われていることに気づいていなかった。息を殺したリーダー格は、チエに照準を合わせて、引き金を引こうとしていた。

「.....！！！！」

チエが狙われていることに最初に気づいたのは、リカであった。彼女は、咄嗟にチエを押し倒して銃弾を避けさせようとした。

「...パン！」

銃声が鳴り響き、発射された銃弾は、リカの頬をかすめて着弾した。チエは無事助かり、撃ったリーダー格は無念に思い、そのまま力尽きた。

「.....なんて奴や、しぶといな、リカ...助かったわ、ありがとう！」

助けられたチエは、心の底から感謝してリカに頭を下げた。

「私からも礼を言うとかわ、よくリーダーを守ってくれた！」

トヨコもリカに感謝の意を述べ、彼女は新しい仲間にもまれて褒め称えられた。しかし、そん

な中、リカの様子が何やらおかしかった。

「...どうしたんや？立たれへんのか？」

「...ええ、ちょっと足を捻ったみたいで...たいしたことないんですが...」

その時、大した怪我ではないと片づけたリカであったが、この怪我が大きな災いを齎すとは夢にも思わないことであった。

チエはリカに肩を貸して、仲間と共に廃墟施設を出ようとした。しばらくして応援のヘリがやって来て、捕虜となった捜査員たちは、無事に病院へと搬送された。

こうして、リカたちの活躍により、テロ行為は阻止され、劇団員たちは稽古に打ちこむことが出来た。

しかし、悲劇は突如起こった。

「...！つ.....！」

リカは稽古場で倒れ込み、左足を押さえて痛みを我慢していた。仲間が心配する中、検査すると左足の小指を骨折していた。この怪我は、任務でチエを庇った時に足を捻ったことが原因とされた。これによりリカが出演するイベントは降板となり、チエの主演お披露目公演も出演が危ぶまれた。しかし、そんな彼女に奇跡が起ころうとした。苦渋の決断で、リカの代役が発表されようとしたが、予想以上にリカの骨折の治りが早く、担当医、演出家の許可を得て、舞台に立つことが可能となった。リカは、自分のことでチエのお披露目公演に穴を開けたくないため、必死にリハビリに励み、自主トレーニングを行った。そして、彼女の執念で無事に足が完治し、公演初日を迎えた。

リカはチエ扮する主人公の親友役であり、後に悪に染まる人物を見事に演じ切り、成功を収めた。こうして、リカは試練を乗り越えてチエと名コンビになったのであった。

「...懐かしいな～でもつい最近のことみたいやな～」

「...そうですね、あの時は色んなことはありました～」

「...ところで歌劇団を辞めるわけやから、例の仕事も辞めることになるわけやな...」

「...ええ、そういうルールですから...」

「副業は好きな方か？」

「いえ、どちらかといえば嫌いです...」

「裏稼業を辞めるには、表舞台でやってる今の仕事を辞めるしかないからな...」

リカたちは、裏でやっている密偵活動のことになると深刻なトーンで話し出した。

「長く続けていれば、どっちが本業でどっちが副業か分からなくなる...体がまだ正常なうちに辞めたかったものですから...」

「...それはいい判断や...それで辞めた後、何かプランはあるんか？」

「...やりたいことはいっぱいあるけど、はっきりとしたことは決まってませんね...とりあえず休養したい...家族と一緒に過ごしたいですね...」

「...まあ自分にご褒美もいやろ...?でも長く休むつもりはないやろ...?」

「...そうですね、今は歌劇団と裏の世界しか知らないんで、視野を広げて生きていこうと思っ
てますけど...やだ、なんか記者会見、受けてるみたい...!」

リカたちはしばらくの間、雑談を続けて和やかムードに包まれた。

それから平穏な時間が流れていき、あっという間に大晦日となり、あと数時間で新年を迎えようとした。こうして、リカは激動の一年を迎えることになったのであった。

第二話 波乱の幕開け 前篇

二〇一四年 元日

朝日が昇って行き、新年の朝を迎えようとしていた。普通ならゆっくりと初詣に出掛けたり、家でおせちやお雑煮を食べながら、ごろごろするのが日課ではあるが、兵庫県に位置する歌劇団は、新年早々慌ただしかった。

歌劇団大劇場は、朝日の光を浴びて、記念すべき年にそびえ立っていた。

大劇場前は、朝早くから大いに賑わっていて、黒紋付袴の姿で歌劇団の生徒が続々と顔を出していた。

その日は、新年の口上を行う大事な日で、特別な年でもあり、錚々たるメンバーが集結していた。また、劇団員全員が集まることは滅多にないことである。人気スターが集まる中、現役トップスターが中心となり、口上は行われた。トップスターの一人であるリカも、五十周年に対する想いを熱く語った。関係者や大勢のファンが見守る中、一日目の口上は無事終わった。そして、新年最初の歌劇団作品が開演しようとしていた。

先陣を切るのは、歌劇団の広告塔としての役目を果たすチエが率いる班であった。昨年、久々の海外公演が行われ、結果は好評で成功を取めて海外に向けて幅広く知れ渡った。演目は、完全な新作で、これは五十周年記念の作品で、海外の作品を得意とするチエの班にとっても、新境地を開く作品となった。

今回の作品は、通常の作品と比べ、歌のシーンが多く、舞台セット等は、豪華絢爛で多額の費用をかけて、稽古時間も通常の倍以上の時間を要している。まさにこれこそ超大作といえるものである。グランドフィナーレでは、スターたちが華麗に舞台を舞い、場を盛り上げ、最後には黄金の煌びやかな羽根を纏ったトップスターのチエが現れた。

こうして無事に上演され、この公演に続いて、各方面で歌劇団スターが暴れまわるのであった。

リカは、名古屋公演を控え、稽古に没頭していた。彼女にとっても特別な年になることは間違いなかった。

正月気分が抜けた一月某日。

その夜、リカは、舞台稽古を早めに切り上げて別の仕事をしていた。

彼女の裏の顔は秘密警察職員である。表の顔である舞台女優の仕事の合間を縫って、隠密活動を行っている。リカの場合、本業ともいえる舞台の仕事の都合で、活動範囲は日本全国となる。スケジュールは歌劇団側と提携して、ちゃんと管理されていた。

リカは相棒の男性職員、安藤ユウと共に某高級中華料理店を車内から覗いて張り込みをしていた。

秘密警察に属している歌劇団員は数年在籍すると、捜査員の一人が相棒に就き、協力して捜査することとなる。歌劇団員の相棒は裏の相方と呼ばれ、主に情報提供や裏稼業のスケジュール管理を任せられるため、マネージャーの役割も果たしている。（歌劇団員同士で捜査することも

あり、力量や歌劇団側と警察組織側の都合で捜査体制は変化する)

リカと安藤はコンビを組んで十年経ち、息が合っていると思われたが仲は良い方ではなかった。

「...ここで本当に間違いないの？」

「ああ、確かな情報だ...そろそろ来るだろう...」

「...大事な稽古切り上げてきたんだからね～」

「...任意だったはずだ...別に来なくてもよかったんだぞ...」

「...まあこっちの仕事も大事だからね...稽古もどうにか間に合わせる...」

「.....」

その時、何故か安藤は押し黙った。

「...何、どうしたの？」

「.....お前、舞台とこの仕事を辞めるそうだな...」

「.....もう情報がだだ漏れね...」

「同僚は、ほとんど嗅ぎ付けている...辞める理由は？まさか若いのに重病を抱えているとか...？」

「...そんなんじゃないわ...そうなる前に辞めたくてね...」

「...家庭が恋しくなったか？寿退社とか...？」

「...そんなんじゃないって！」

「...一気に二つの仕事を失うことになる...その後どうする？」

「...やりたいことは山積みよ...当てはあるし...」

「そうか...それならいいが...」

「何？心配してくれてるの？」

「...そういうわけでもないが、ただ、今の仕事が嫌でろくに何も考えず辞めていった者を何人が知っているんでね...やはり元の環境の方がよかったと思った時はもう遅い...これで自分の居場所を失うわけだ...」

「...私は、そんなに馬鹿じゃないからご心配なく...」

「...これで俺たち名コンビは解散ってわけだ...十年くらい一緒だったのかな...」

「...本当に時間が経つのは早いわね...一応言っとくけど、すぐに辞めないわよ...あと一年は今の仕事を続けるつもりだから...」

「...何だ...まだ結構あるじゃないか...もう新しい相棒が来るのかと思ったよ...今度はお前より素直で可愛い女性がいいな～」

「...どうかしらね、私よりごつくて気の強い人がなってくれたらありがたいけど...」

リカは、笑いながら相棒の安藤に嫌味を言い放った。

「.....はじめ会った時は可愛かったのにな～ますます生意気に.....！！」

会話中に安藤は、あることに気づいた。

「...どしたの？」

「...雑談は終わりだ...現れたぞ...！」

待っていた標的が現れたようで、リカたちは店から目を離さなかった。

「.....あの男ね」

「...ああ、石橋新次郎...今は腕のある政治家として居座っているが実は腹黒い男だ...ずっとマークしていたが、なかなか尻尾を出さない...ようやく有力な情報を手に入れたわけだ...」

「...また誰か現れたようだけど...」

辺りは暗く視界が悪いため、最新の暗視スコープやカメラを即座に取り出した。

「...撮影の方を頼む...続々と大物が現れるぞ！」

「...はいはい」

安藤の言った通り、闇社会に精通している大物政治家や暴力団、中国マフィアなどいかにも怪しい顔ぶれが集結し、リカはすかさずシャッターを押した。

「...よし、これで役者が揃った...！」

安藤は満面の笑みであるが、リカはあまり気分が乗らなかった。

「...店に潜入するの？」

「ああ、勿論だ...この日をどれだけ待ったか...情報を集めてくる...」

「...それじゃあ行きましょうか」

「.....」

その時、安藤は何故か返事をしなかった。

「...どしたの？」

「.....お前はもう帰っていい...もうじき交代で職員がやって来る...ご苦労だったな...」

安藤は、あっさりとりかに別れを告げた。

「...え？ どういうこと？ 今夜は私、大丈夫よ...徹夜だって出来るわ...」

「.....公演を控えているお前に、そんなことをさせるわけにはいかない...あとは任せてくれ...」

「...上からの命令？」

「.....そういったところだ、もう帰って休め...今は、舞台の仕事の方が大事だろう...？」

「.....」

少々、納得がいかなかったが、仕方なくリカは、車から降りてそのまま去っていった。

「.....やれやれ、馬鹿な女だ...このまま仕事を続ければ体ぶっ壊れるぞ...」

安藤はリカが去った後、そっと呟いた。

実は上司からの命令というのは全くの嘘で、彼なりの優しさで彼女を帰したのであった。

リカは、タクシーで自宅のマンションに帰宅した。特にすることもなく、彼女は全身の力を抜き、部屋のベッドに蹲った。

「.....もう潮時ね...辞めるのを決めて正解だったかも...」

体のことは心配ないと言っていたが、彼女は精神も肉体もぼろぼろであった。歌劇団スターは、経験を積んでいくことで成長するわけであるが、それは容易なことではなかった。限られた時間で、自分に与えられた役を完成させなければならない使命がある。特に出番が多い主演男役は、計り知れないプレッシャーを背負って舞台に打ち込んでいる。

最近では活躍の場は、舞台だけにとどまらず、その他に雑誌、専門チャンネルの出演、テレビ出演が重なり、おまけに年間の公演数も増えていき、劇団員たちは多忙を極めていた。

さらにリカは、裏で隠密、スパイ活動を行っている。危険を伴う仕事のため、怪我をしたり、死にそうになったことは幾多も経験している。それを承知の上でリカは十年以上、二つの過酷な仕事に耐えてきたのであった。今思えば彼女の恵まれた体は、表と裏の世界を生き抜いたことで作り上げられたものかもしれない。

しかしながら、彼女は自分の体の限界に気づき始めていた。どうも最近体調を崩すことがあり、はじめは風邪かと思っていたが違っていた。長年の疲労が溜まり、体に異変が起きようとしていた。それは悪影響を及ぼすサインであった。

真面目な性格のリカは、そのまま眠ってしまわず、しばらくしてから起き上がり、ちゃんと寝支度をした。次の日も厳しい稽古の日であり、彼女をそれに備えて休息を取った。日には経って行き、ついに、新年初のリカの公演が開かれようとしていた。

同じ頃、場所は東京、警視庁

薄暗い個室に二人居て、一人は姿勢よく立っており、一人は少々横柄な態度で誰かとテレビ電話で話していた。電話しているのは公安の課長で、課長の前に立っているのは、部下の一人であった。

「.....そうですか、先にそちらを訪ねましたか、手間が省けたことになりませんかね...」

「...ええまあ、しかし、正直言って驚きました...彼女自ら告白するとは.....」

電話の相手は、歌劇団の理事長であった。

「...先を越されましたね...彼女の異変には気付きませんでしたか？」

「.....ええ、ここ最近、忙しい時期が続きますが、特に問題はなかったかと...彼女は表情に出しませんし...」

「...そうですか、そちら側にいることの方が多いので、どうかと思ったんですが.....それで彼女はきっぱりと今の仕事を辞めると...？」

「...ええ、会見を行う日は調整中です...」

「.....非常に残念ですね...また優秀な人材を一人減ってしまう...お互いに...ね？」

「.....仕方がないことです...だから休まず、注目の人材を育成してるんです...」

「...そうですね、あなた方には本当に感謝している...まさか伝統ある歌劇団に公安の職員が居るとは夢にも思わないことだ.....今年で五十年ですか...素晴らしい年ですね...！」

「...ええ、祖父がこの歌劇団を世に生み出しから丁度五十年...我々の力だけで、ここまで辿り着いたとは思えません...こちらあなた方の組織や日本政府には数えきれないほど助けられている...もう半世紀、太いパイプでつながっていますからね...そちらの支援がなければ今の歌劇団はない...！」

「.....困った時はお互い様ですよ...日本がスパイ天国と言われるのを覆すためにあなた方が必要だ...これからも力になってほしい...！」

「...勿論です.....ところで彼女本人と一度会って話をしようと思うんですが...顔は出せますか？」

「.....ええ、行けますよ、そちらに合わせます...場所も指定していただければ.....」

「承知しました...彼女の名古屋公演が済んだ後を予定しています...決まり次第ご連絡いたします...お忙しい中、ありがとうございました.....」

テレビ電話での会話が終わり、課長はひとまず一呼吸した。

「...理事長とお会いになるんですか？」

部下の一人の男が、そっと課長に声を掛けた。

「...ああ、丁度いい機会だ、五十周年のお祝いを兼ねて会って来よう...」

「...スケジュールは、今のところ心配ありません...」

「.....そうか...と言っても何かと忙しい...嫌なことを耳にする...」

「...うちの課だけ経費が削られるそうですね...?」

「...ああ、功績は認められているが、まだ評判が悪いからな...犯罪組織とつるんでいるのではないかと噂されることもあった...昔と比べたらましか」

「.....外交問題が荒れているようです...北朝鮮、中国、韓国から集中砲火されるのは避けたいのですが.....」

「...ロシアも忘れるな...一番脅威になる国だ...」

「...最近、不法入国している外国人による犯罪が多発しています...明日の午後、対策会議が...」

部下の男は、手持ちのスマートフォンでスケジュールを確認した。

「.....はっきり言って人手不足だ...また補充しなければ.....」

「.....歌劇団からスカウトされますか？」

「.....ああ、そのつもりだが...今は無理だろ...あちらは五十周年のことで頭がいっぱいだ...もう少し落ち着いてからでもいいだろう...」

「.....いい人材が見つかりそうですか？」

「...さてね、彼女たちの隠された力には驚かされるが.....はじめてリカに会ったのは十年ほど前か...」

課長は、リカと会った時を思い出し、懐かしんで笑みを浮かべた。

「はじめて彼女に会った時の印象はどうでしたか？」

「.....そうだな、まず美人だったが地味な方だったな.....口数が少ないし、これという特徴はなかった.....」

「...では何故スカウトを？」

「.....それは妙に落ち着きがあるが、独特な雰囲気を感じることがあるからだ...それといい目をしている...理事長が言っていた...時間が掛かるかもしれないが、この娘は近い将来必ずいいものに化けると.....」

「...それで興味を...？」

「...ああ、理事長の言う通り、彼女は時間が経つにつれて、成長していった...表では魅力ある舞台人に成長し、裏では優秀なエージェントに...予想以上の大物になったな...」

「...公安のスカウトで来た時、どんな反応でした...？」

「...別に騒ぎもしなかった、話を続けると、興味を持ってくれて快く引き受けてくれたよ...」

「.....確かに彼女のようなエージェントは少ないですね...」

「...ああ、彼女には内緒で舞台を観劇したことがあるが、実に煌びやかだった...まさにスター...とても裏で隠密活動をしている者とは思えない...あの娘は完璧に別の者に化ける...」

課長は少し切ない表情を浮かべ、リカの魅力を事細かに述べた。それはまるで実の娘を自慢しているかのようであった。

それから時は流れて、リカが主演を務める公演が名古屋で開演された。彼女たちの熱演は、多くのファンに伝わったようであった。こうして彼女たちは無事に千秋楽を迎えた。

一仕事を終えたりカであったが、彼女に休む暇はなかった。彼女はある人物たちと会う約束をしていて、そのまま直行した。彼女が向かう場所は、大阪にある予約制の料亭。座敷には既に大勢の人間が待っていた。それからしばらくしてからリカが到着し、待ち合わせしている者の前に現れた。

「.....すみません、お待たせして...」

リカはまず正座して、行儀よく座礼した。

「...いやいや、急に呼び出して申し訳ない...公演が終わった直後だというのに...」

「.....お互い都合が合うのは、この日しかなかったからな...すまない」

リカに声を掛けたのは、公安の課長と歌劇団の理事長であった。周りにはそれぞれの幹部や関係者が座っていた。

「...こっちに来て座れ...腹を減らしてないか？ここの料理は格別だ...食事をしながら話をしよう...」

リカは手招きされ、課長たちと向き合って座った。

「...今回呼び出したのは他にもない...お前の退団のことについてだ...」

公安の課長が仕切り始めて早速本題に入ろうとしていた。

「...実はというと、そろそろ退団について話そうと思っていた.....自分から報告に来たことには少々驚いた.....もう考えを変える気はないんだな？」

歌劇団理事長が優しくリカに訪ねた。

「...はい、もう決めたことですから...」

「.....去年報告を受けたが、詳しく訊けなかった...もう限界を感じたわけか...？」

課長は、熱燗の酒を一杯注いで激しい剣幕でリカに質問した。

「.....はい、そろそろ引き際かと.....」

「.....体調が悪いのか？」

課長は、リカが退団する理由を掘り下げようとした。

「.....体は特に問題ありません...」

「では中身か？」

「...いえ、まともな方かと...」

「.....そうか、もう少し続けられると思うが...どうでしょうか、理事長？」

理事長は、課長の問いに対して少々表情が硬くなった。

「.....確かにあと少し続けてほしいという気持ちがありますが...彼女はトップになってから多忙を極めています.....二つの過酷な仕事を抱えていてはいつか体を壊します...それに気づいた時は既に遅いという場合もあるのでは...？」

理事長は、出来るだけ丁重に反論した。

「...確かにそれも一理ありますな...彼女以上のエリートは山ほど居るが、体の無理が生じて、余儀なく引退することとなった者が多く居る...仕事上の怪我に悩まされたり、女性としての機能を失った者まで居る...最悪のケースは早すぎる死に直面するという事...最近そういうことは随分と減りましたが...」

「.....」

リカは、黙ってじっと二人の会話を聞いていた。

「...教育方針を変えたんですよ...長い下積みを経験させ、短期間トップの座に就かせ卒業...ファンや関係者の中で賛否両論となりましたが致し方なかった...一人の女性の人生がかかっていますから...」

「.....何処の世界も同じですな...切り替わりが激しくなかなか長続きしない...人材不足になる

のは当然だ...我々の仕事は中でも特殊だから仕方ないですが...」

「...お互い同意した上で、退団するのが決まり事です...何か意見は？」

「.....まずは彼女から意見を訊いてみてはいかがかな...何かあるか？」

課長は、発言権をリカに譲った。

「.....歌劇団退団後のことで、お訊きしたいことがあるんですが...どうしようかと...」

リカは、歌劇団側に向けて質問した。

「ああ...何かプランなどあるか？全力でサポートしよう...頼ってもらって結構だ...」

「...ありがとうございます、具体的にはまだ言えないんですが...歌劇団関係の仕事なら何でも引き受けますので.....また会見の時に発表するつもりです...」

「...そうか、家庭に入るつもりはないんだな...？時代も変わったな...最近、OGのほとんどがずっと現役で仕事している.....」

その時、理事長の表情は覇気がなく、何か言いたげであった。

「.....それと課長、歌劇団を退団すれば、公安の仕事は辞めることになるんですよね...？」

「.....ああ、そのことなんだが.....」

「.....？」

その時、課長の発言は曖昧で、まだ続きがあるようでリカは聞く耳を立てた。彼女は公安部の課長からの思いがけない発言を耳にして愕然とするのであった。

第三話 波乱の幕開け 後篇

予約制の某高級料亭、そこでは表と裏の世界の重要人物が集まり、リカは、彼らの前で二つの世界から身を引くことを発表しようとしたが、事態は思わぬ方向に向かおうとしていた。

「実はルールが変わってな.....部署を退職、除外されるのは退団して家庭に入った者だけとなるんだ.....今のお前の意見を聞く限り、公安の仕事は続けることになるが.....」

「.....そうですか」

その時のリカの声のトーンは、低かった。

「...何だ？辞めようと思っているのか？」

課長の質問に対し、リカはなかなか口を開こうとしなかった。

「...確かに長く続ける仕事ではない...しかし、これも使命だ...関係を絶つことは出来ない...ここ数年、人手不足でな、歌劇団のように豊富じゃない...優秀な人材が抜けていくのを出来るだけ避けるためだ...よって、裏の仕事は続けてもらうことになる...納得するには時間が掛かると思うが、これが現状だ...何か言いたければ聞こう...」

「.....強く辞める意思を強く伝えても無理ですか？」

「.....よほど辞めたいようだが、了承は難しいことだな.....ただ変更点がある...」

「...！」

リカは、課長のさらなる予期せぬ発言に強く反応した。

「...よく聞いてほしい、歌劇団退団後、裏の仕事の続けてもらうわけだが、環境が大きく変わる...臨時職員のようなものだ、人手が足りない場合、難航している仕事が溜まってきた場合、手を貸してもらうことになる...フリーになるわけだから以前より仕事の量が減り、拘束されることがなくなる...だから好きなことが優先されるはずだ...勿論、報酬は払うし、かなり高額だ」

リカは、課長の事細かな説明で表情が少々和らいだ。

「.....充分分かりました、それなら承ります！」

課長は、リカのいい返事が聞けてほっとした様子であった。

「...ありがとう、ではそれで契約してもらおう...それとお前に是非参加してほしいことがある...」

「...参加してほしいこと？」

課長は、また予期せぬことを口にした。

「...それを話すのはまだ早いのでは？」

その時、すかさず幹部の一人が課長を止めようとした。

「...まあいいじゃないか、ほんのさわり程度だ.....あるプロジェクトを推進しようと考えていてな...協力してほしいんだ」

「...はあ」

「まだはっきりしたことは決まっていない...詳細は、お前が歌劇団を辞めてから話そう...また新しい契約書とマニュアルを渡す...」

「...了解しました」

リカは、呆然と返事をした。

「私が言いたいことは以上だ...あとは理事長に任せましょう...」

「...私も重要なことは伝えました...堅ぐるしい話は、これでお開きとしましょう...君とこうしてゆっくりと話すのも久々だ、今夜は思い存分食べてくれ...日頃の活躍のお祝いだ！」

リカは緊張感のある空気から解放され、ようやく目の前にある豪華な和食に手を付けることができた。

その後、豪華な食事会が開かれ、リカは酒が入り、気づけば夜が更けていき、べろべろになりながら用意された送迎車で自宅へと帰った。彼女は自宅に着いた途端、大物たちと会ったことによる緊張と酒の酔いで疲れ果て、寝床に着く前に倒れ込んだ。

「...やばいな...でも明日は休みだからゆっくり休めるわ.....！」

意識が朦朧とする中、リカの仕事用のスマートフォンにメール着信が入った。

「.....あいつか」

送信者は、裏稼業の相棒である安藤であった。メール内容を確認したリカは、力を振り絞って立ち上がり、冷蔵庫から飲料水のペットボトルを取り出した。強引に飲んでいるため口から大量に溢れていた。リカはしばらく何も考えず座り込み、適当に睡眠を取った。

三月のある日、リカは安藤と会う約束をしていた。待ち合わせ場所は、大劇場近くの河川敷であった。

そこは兵庫県南東部を流れる河川があり、地元で有名な大橋が架かっている。また、歌劇団とつながりがある関西ローカル線の電車が走行している。川のせせらぎを聴きながらリカが静かにしゃがんで待っていた。

「よう、待たせたな...」

数分後、安藤が現れて彼女の横に座り込んだ。彼はアイスコーヒーが入った紙コップを二つ持っていた。

「...飲みな、奢りだ...」

「こりやどうも...」

リカは、愛想悪く安藤から紙コップを受け取った。

「.....ボスたちと会ったそうだな...この先のことで、根掘り葉掘り訊かれたのか？」

「...まあね、どっと疲れたわ...」

「...で結果どうなった？」

「.....退団することで裏の仕事も辞めれると思ったけど、ツメが甘かったみたい...」

リカは、沈んだ顔で安藤に告げた。

「...それは残念だったな」

「.....ただし、仕事の内容は変わるみたいよ、前より少し楽になるかも...」

「...あらま、そうですか」

安藤もまたつまらなそうな顔を浮かべ、気持ちを切り替えてから本題について話そうとした。

「.....これは例の不正取引事件で張り込みした時の写真だ...」

「.....ああ、私も何枚か撮ってるやつね...」

「...闇社会の重鎮の多くが集まっているが、標的はあくまでもこの悪徳政治家の石橋だ...奴は、陰で政治活動するための資金を闇社会の組織から援助してもらっている...他にもきな臭い話をしていた...大物議員も顔を出して、政界に悪影響を与えようと目論んでいる...証拠の会話は、録音して上に提出した...」

「決め手となる材料は揃ったわけね...」

「...ああ、石橋の秘書にも接触して、彼に洗いざらい吐いてもらった...」

「...それじゃあ、もう解決じゃない？」

リカの言葉に対し、安藤はなぜか困り果てている様子であった。

「.....ところがだ、家宅捜査をしようと思うんだが、まだ許可が下りない.....恐らく何処からか圧力が掛かっているような気がする...あと一歩なんだが...」

安藤は悔しさを滲ませ、思わず腕に力が入り、持っている紙コップを握りつぶした。

「...でこれからどうする気？引き下がる気はないでしょう？」

「...当然だ、これでは長年の苦勞が水の泡になる...一応手はある...ようやく手掛かりをつかんだ...」

「手掛かり...?」

「...奴の書齋のパソコンに不正の証拠が記されたデータが保存してある...それを盗めば有利になる...」

「...強引に動くしかないようね...それで盗みに行く気?」

「...ああ、そのつもりだが俺は行けない...顔が割れてマークされている...おまけに書類整理という雑用に追われていて、踏み込めそうにない...そこで考えた...お前に盗んできてほしい...!」

「...私一人で?」

「...ああ、お前は顔が知られていないからな...動きやすいだろう」

安藤はりかの応答を待たず、スマートフォンで地図アプリを開き、石橋の自宅の場所を教えようとした。

「.....ここだ、奴が留守の時に忍び込んでほしいんだが...」

「...オッケー」

りかは少々浮かない顔であったが、仕方なくオーケーサインを出した。

「...この日はオフの日だろ?忙しくなるのはもうちょっと後だろう...?」

「...スケジュールをおさえているなんて...まるでマネージャーね...」

「...仕事がクビになれば、お前のマネージャーとして、雇ってもらいたいね...」

「...それは絶対お断りよ、表の世界であんたと関わりたくないわ...」

「...冷たいね~」

安藤は、苦笑いを浮かべ立ち上がった。

「.....前に私の舞台を観に行くとか言ってたわね...？」

「...ああ、実は先日あるルートでチケットが手に入ったんだ...結構いい席だ...」

「それ...ちゃんとしたルートなんでしょうね...？」

リカは、疑いの目で安藤を睨み付けた。

「...ああ、この作品、人気があるんだろ？」

「...あんたみたいなにわかファンじゃ値打ちないわね...」

リカは、呆れ顔で立ち上がった。

「.....じゃあよろしく頼む...何かあれば連絡を...」

「...ええ、それじゃあ」

二人はお互い反対方向を歩きだし、そこで別れた。

そして、石橋邸に忍び込む日が訪れた。周辺は高級住宅が建ち並び、静かな夜であった。そこにリカはそっと足を踏み入れた。

「...裏金で建てた家にしては立派ね...」

リカはブツブツと嫌味を呟き、任された仕事を済ませようとした。

不正の証拠が記されたデータは見事にリカが盗み出し、警察組織の手に渡った。これにより一斉捜査が開始され、石橋が挙げられるのも時間の問題であった。

不正の証拠が盗み出された日の翌日、石橋関連のニュースが流れているが、盗んだ当の本人は、表の仕事に集中して全く気に留めなかった。

桜咲く何とも心地よい空気に包まれた春の季節。ついに運命の日が訪れた。その日は、歌劇団五十周年を祝う祭典が行われる日であった。

四月で丁度五十年を迎えた歌劇団、劇場前はこれから起こる出来事で騒然としていた。送迎車が續々と到着し、それをマスコミ関係者やファン大勢が囲んでいた。車を降りて現れたのは歌劇団スター、歌劇団の歴史に名を刻み、伝統を受け継いできた歴代のスターたちである。

颯爽と歩くその姿は、実に輝かしいものであった。半世紀前に退団した卒業生の一部は、今でも表舞台で活躍している。また、家庭に入った卒業生は、久々に大劇場を訪れることとなる。歴代スターたちは、マスコミの取材を受けて、祭典が行われる大劇場へと足を運んだ。

集まっているのは卒業生だけではなく、現役生も祭典に参戦することになる。若手劇団員の多くは、歌劇団の正装ともいえる黒紋付袴の姿で現れていた。人の波は途切れることはなく、祭典が始まる前から既にお祭り騒ぎであった。

現役トップスターのリカも、興奮と緊張に包まれながら待機していた。

祭典が行われる時間が訪れ、観客席は予想通り満員で、運命の瞬間を待ち望んでいた。公演チケットの一部は、ネット経由、ダフ屋の手により高額で販売され異常な事態を巻き起こした。

ついに運命の幕が開かれ、観客席は感情が高ぶりどよめいた。

舞台を見渡すと横一列にずらりと伝説のスターが並んでいた。まさに夢の共演であった。スターたちは、歌劇団の代表曲を合唱して、存在感をアピールした。

続いて当時のスターが学年順に現れて、現役時代の時の代表された作品の歌を披露した。

それはファンにとって言葉に出来ないほどの感動の瞬間であった。また歌を挟んで卒業生によるトークショーも開かれ、当時の思い出話や裏話で花が咲いた。

舞台上では奇跡の共演が実現し、進行する司会、スペシャルゲスト、パフォーマーなど舞台に立っているのは、歌劇団スターだけである。

歌劇団の舞台というのは、独特な世界観を吹き込む聖域とされている。

後半は現役生も登場し、卒業生との夢の共演を果たし、盛大なイベントの一夜は幕を閉じた。

しかし、これはまだ始まりにすぎなかった。また別日に同じように豪華スターが續々と登場して多くのファンを湧かせた。

祭典の様子は、専門チャンネルだけでなく、地上波の情報番組でも取り上げられるほどであった。

その日、大劇場の楽屋では各班のトップスターたちが出番待ちしていた。その合間、彼女たちは偉大なる先輩と雑談したり、記念写真を撮ったりして、まさに夢のような時間を過ごしていた。

現役スターには歌劇団ファンが多く、尊敬する先輩を目標にして、芸を磨いているのであった

。

そんな中、リカは自分の出番に備えて、精神を集中して楽屋のソファに座っていた。

「...よっこいしょ～」

その時、リカのとなりに爺臭い掛け声を発した人物が座り込んだ。

「.....そろそろ出番ですね～」

「そうやね、心臓バクバクやわ～」

リカの隣に座ったのは、現役トップスターのマユであった。

彼女が受けた年の入学試験は、過去最高の倍率四十倍以上あり、その中で入学から卒業まで一度も首席の座を渡さなかったことで知られる。さらに彼女は早くから注目され、実力が高く評価されて着々とスターダムの道を駆け上がって行った。

マユは、学生時代に打ち込んだダンスが活かされ、`踊りの神の申し子、としてトップスターに抜擢された。また歌唱力、芝居にも定評があり、圧倒的な存在感で舞台に立ち、多くのファンを魅了した。しかしながら、式典後の公演で退団することとなっている。

彼女は、歌劇団の伝統を守り続けたスターの一人として名を残し、新たな道に進もうとしていた。

リカは、マユの舞台女優論に惚れ込んでいた。

「...マユさんでも緊張しますか？」

「そんなの当たり前やんか、何処見ても伝説のスターが歩いてるんやから...もうガチガチやわ～」

「...そんなもんですか～」

先輩のマユが緊張する中、後輩のリカは妙に落ち着いているので、どうもおかしな状況であった。

「.....この祭典、式典が終われば退団公演ですね...」

リカは、話のネタがなかなか見つからず、唐突にマユの退団のことを口にした。

「...そうやね～ぎりぎりやけど、この夢の大イベントに参加出来てよかったわ～」

マユは、リカの唐突な発言に対して、少しも表情を変えずに優しく答えた。

「.....こんなこと、私がいうことじゃないと思いますが、心残りはありますか？」

「.....ないね、もうここで出来ることは全てやったつもりや...いいことも嫌なこともあったけど、この歌劇団の舞台人であることが何より幸せやった...ファンの人も分かってくれるよ、多分...」

マユは、真っ直ぐな目で何の迷いもなく、後輩のリカに考えを述べた。

「.....本当に寂しいですね...どんどん一緒に仕事してきた仲間が去って行く.....いつの間にか上級生になっていました...」

「.....確かに最近、入れ替わりが激しいね...まあ事情があるんやろ...私らがとやかく言うことじゃないと思うけど...私はあんたの実力認めてるで...！」

「...え？」

マユは、さりげなくリカを褒めようとして、それに対し、リカは少し頬を赤く染めた。

「...急に何言いだすんですか！」

「...そう照れることないやろ、ほんまのことやで、舞台の世界にぴったりの印象があるわ...普段はふにやってしてるけど...もう共演できへんのが残念やわ...同期のエリが羨ましいわ～やっぱり結構早くトップになったね～」

「...そう言われるとありがたいですが、変な話、まだトップになった実感がないんです...本当にトップに就任したことは嬉しいですけど...毎回、舞台に立つ度にトップとしての役目を果たしているか不安で...」

「...もっと自信持ちて！そんな弱気じゃ仲間がついてこなくなるで...」

マユは、落ち込むリカの肩を強めに叩いた。

「ありがとうございます...」

「.....でも」

「！」

その時、今度はマユの方が何か思い詰めた表情を浮かべて、何か話そうとしていた。

「...正直な話...心残りがないとは言い切れへんかもしれんわ...」

「...何か問題が？」

マユは、一度頷いてから話そうとした。

「...私は子供の頃から踊ることが好きで、青春をほとんどそれに注いだ...将来は踊りが関わる仕事に就きたいと考えていたけど、そんな時、この歌劇団に出会ったわけで...もう一瞬で虜になったわ...まさに夢の世界...特に影響を与えたトップスターが一人おってな...その人は、とにかくダンスが抜群に上手かった...上手いなんて言葉で言い表すなんて失礼なくらいやった...多くの人を魅了するダンス...私も彼女のようなダンサーになりたかった...それで歌劇団の入団を決意したわけや...」

「.....私にも居ます、目標のスターが...」

「...そやろ、私が入団した頃には既にその人は退団してたけどね.....でも私が尊敬するのはあの方一人、目標にして一心不乱になって芸を学び、身につけたわ...」

「マユさんの歌劇団に対する情熱、好きになった根源は、全てその方が居てこそあるんですね...」

「.....そういうことや、いつか会えるのを夢見て舞台に出てきたわけやけど、結局叶わなかったな.....」

「？」

その時、マユのトーンが一気に下がり始めた。

「.....まさかあんなに早く亡くなるなんて...信じたくなかったわ...忘れもしない二〇〇九年十一月...」

「...！」

その時、リカは、マユが尊敬する歌劇団スターが分かり、そのスターの顔が頭の中をよぎった。

マユが尊敬する歌劇団スターは、ナツメという女性であった。彼女は、歌劇団屈指の伝説のダンサーとして長年活躍していた。退団後も積極的に舞台中心で活動していた。

しかし、悲劇は突然起こった。彼女は病魔に侵され、命は儚くも散って行った。まだ五十代の若さであった。お別れ会には共演者、OG、ファンら計三千人が駆けつけ悼まれた。

「何であんなにええ人が死んでしもたんやろか...雲の上の存在だったけど、本当に雲の上に逝ってしまうなんて...心残りはあの方と一緒に踊れなかったことやな...」

マユはしみじみと語り、彼女の目には光るものがあつた。

「...すみません、私の勝手な質問で、嫌なことを思い出させてしまつて.....」

「...いいんや、話して気が楽になる時もある...それに私はまだあの方の後を追ってるんや、私は歌劇団を辞めてもダンスは続ける...あの方の足元にも及ばないけど、自分の想いを表現する仕事は続けていきたい...！それに.....」

「！」

その時、マユは、リカに近づき耳打ちした。

「...裏の仕事も続けていく...日本の平和も守っていかないとね～」

マユは、冗談を交えてリカに告げた。彼女もまた公安が誇る優秀なエージェントであった。

「いや～それにしても長いこと喋ったね～こういうのって初めてかも...」

「...そうですね、こんなの滅多にないことですから.....」

「...そろそろ準備お願いします～」

そこにタイミングよくスタッフがリカたちを呼びに来た。

「...さあ、卒業生に負けないくらいに暴れよか～」

「はい！」

現役トップスターであるリカたちの出番となり、OGに負けず劣らず大いに舞台を盛り上げて無事最終日を迎えた。

翌日、記念式典が行われる日であった、この日は現役の劇団員が全員集まり、観客席には各界の有名人、著名人が続々と着席していき、皇族からも出席していた。

ついに式典が開幕し、まず現役の各班トップスターが舞台に現れて歌が、続いて伝統のある日本舞踊を見事に披露された。中盤では、表彰式が執り行われ、あらゆる分野の人間から祝福メッセージが届いた。

終盤では劇団員全員が舞台上に集まり、祝歌を合唱して、歌を場内に轟かせた。迫力ある大合唱が終わり、第二部へと移る。

ここでは五十周年を記念したショーが披露され、古き良き歌劇団の姿を復活させた。こうして夢のような祭典、未来へとつながる式典は幕を閉じた。

第四話 スターの条件 前篇

五十周年記念の祭典、式典が無事閉幕したことでひと段落した歌劇団側であったが、関係者、特に劇団員は気を休める時がなかった。

リカは、別の班の公演に特別出演することになっており、実に慌ただしかった。特別公演が済んだ後も、彼女の試練は続き、まもなく歌劇団代表作の公演の幕が開かれようとしている。運命の公演日を控えるリカであったが、彼女には他にすべきことがあった。今、リカが居るのは稽古場でなく、劇場内の控室であった。ある日、リカの専用スマートフォンに劇団上層部から一通の緊急メールが届き、控室に来るよう命じられたのであった。扉を開いて中に入ると誰もおらず、とりあえずリカは適当に席へ座った。彼女は、そのうち誰か来るだろうと思い、しばらく待とうとした。

「.....全く...どうということ？」

リカは眉をしかめて腕を組み、不機嫌そうに座って待っていた。その姿は、まさに絵になる理想の男役の姿であった。

「...ガチャ」

「!？」

その時、突然、リカが居る部屋の扉が開かれ、彼女は機敏に反応した。

「.....あれ～？」

声を聴くと、ひょうきんな声であった。

「...師匠...?何でここに？」

リカの前に現れたのは現役トップスターの一人、エリ。体育会系で素直な性格が特徴で、多くのファンに愛されている実力派舞台人の一人である。その他の特徴として、頬がこけて、シャープな体型で眼力が強い。悪戯が好きで、ドSスター、という異名もある。とにかく曲がったことが嫌いで、どんな苦難も乗り越えようとして、侍のような人間だと自負する。

熱い演技力、美しいダンス、力強く轟かせる歌唱力と舞台役者のプロとしての実力を兼ね揃えた彼女であったが、下積み時代が長く、ようやく念願叶い、遅咲きのトップスターとなった。エリは就任後、短期で退団することを決意していた。リカが尊敬する現役スターでもあり、彼女のことを師匠と呼んでいる。

エリは、どうも様子がおかしかった。彼女は、お腹を抱えて少々顔色が悪かった。

「あーしんど、こらあかんわ……」

「あの…どうしました？」

リカは、エリを心配して近づき、そっと話し掛けた。

「あ……いや、ごめんな、賞味期限切れのパン食べて…お腹の調子が悪いねん…」

「…そうなんですか…良かったら薬どうぞ…これ、よく効きますよ…」

「ああそう、ありがとう」

リカにもらった薬を飲み、エリは一目散に近くのトイレに駆け込んだ。数分後、先程の険悪な表情が嘘のようで朗らかな表情で登場した。

「いや一助かった、ほんとにありがとう」

「いえいえ、どういたしまして、私もよくお腹壊すんで薬を持ち歩いてるんですよ…」

「そうなの…私と似て繊細やな～」

エリの発言に対して、リカは笑いをこらえた。

「…ところで何でエリさんがここに？」

「…あんたこそ何してんねや？」

「…ここに来るよう指示があったんですよ…」

「…私もそうや…メールで呼ばれて…」

二人は、お互い状況が上手く把握出来ず、棒立ちであった。

「♪…」

「！」

その時、リカたちのスマートフォンに同時にメール着信が入った。彼女たちはすぐさま内容を確認した。

・任務内容

公安課 警備部暗躍係 エリ、リカに以下の任務を命令する。

神戸港に一隻の謎の船が入港している。船内を調べるよう、調査隊を三名ほど派遣したが、調査中、音信不通となり帰還していない。不法入国者が銃器などを密輸しているようだが、それ以上、これといった情報が得られておらず、危険性があるため直ちにこれを調査し、場合によって壊滅を命ずる、作戦等は全て自由、必要な物があれば直ちに準備する。

表の仕事のスケジュールについては、ちゃんと抑えているため心配は要らない、猶予は七十二時間、時間厳守で極秘任務のため、誰だろうが口外しないでこと。それでは健闘を祈る。以上

二人に送られたメールの内容は、同じであった。

「...これって...！」

「...！」

その時、エリの鋭い眼光があるものを捉えた。

「.....高みの見物かい？」

「...視られていますね...」

室内には、小型の監視カメラが仕掛けられており、リカたちは瞬時に状況を整理した。

「.....これはつまり合同任務？」

「.....そういうことやな...長年、裏の世界にも棲みついているけど、こんなことは初めてや...」

「...右に同じです...トップになれば単独で動くのが当たり前かと思っただけでしたが...」

「...ごく稀なことやろ...あんたなら心強いけどな.....」

「...いえ、そんな.....」

リカは謙遜して、若干、心拍数が早くなっていた。

「...そう緊張しないで...面白いやないか...気楽に行こうや」

不安がよぎるリカに対し、エリは楽天的であった。

「♪...」

「...何や...五月蠅いな～」

また同じ送信者からメールが送られ、確認すると催促であった。

「...では行きましょうか」

「善は急げってやつやな...」

リカたちは、任務のため直ちに神戸へと向かった。

三宮

三宮（さんのみや）は兵庫県神戸市中央区にあり、第二次世界大戦後、神戸市の中心街になった地域で、JR、阪神電鉄、阪急電鉄、神戸市営地下鉄、ポートライナーが乗り入れる三宮駅を中心に商業施設が立ち並ぶ繁華街である。

兵庫県を代表する大都市であるが、一九九五年に起きた阪神大震災により大きな被害を受けた。瓦礫の山と化した地域は、時間をかけて再開発が進み、街の活気を取り戻そうとしていた。

リカたちは三宮に着き、まず情報収集をしようと中華街へと向かった。そこは単なる飲食街ではなく、多くの外国人が訪れて、入り乱れており、異文化コミュニティが築き上げられ、あらゆる情報が入手できる場所であった。

「...いい匂いがするね～」

「...そうですね」

リカたちは中華街に足を踏み入れた途端、鼻の穴をびくびくさせ、涎が出そうになっていた。二人は昼ご飯を食べずに出発したため、お腹を空かしていた。

「...もう昼過ぎてんね...どっか入ろうか？」

「...はい、その店に入りましょうか？」

リカたちは、比較的空いている店を選んで落ち着こうとした。入店した店は、庶民的な昔ながらの小さな中華料理店であった。

「へい、らっしゃい！」

リカたちは、威勢のいい年老いた男性店主の挨拶で迎えられ、空いている席に座った。

「...どれも美味しそう～何にしようかな～」

「...私は中華盛り合わせ定食にするわ～」

「...私は酢豚セットにします...炒飯大盛りで...」

リカたちは好きなメニューを注文し、行儀よく待っていた。

「へい、らっしゃい！」

リカたちに続いて、また客が訪れた。男二人、強面でガラが悪く、近寄りがたい連中で明らかに輩であった。その問題の二人組は、リカたちの近くの席に座ろうとしていた。

「よっ姉ちゃん、べっぴんやな～どっから来たんや？」

輩は、厚かましくリカたちに声を掛けた。彼女たちはそれに対し、愛想笑いで返した。

「...お～い、早よ注文訊きに来いや！アホンダラ！」

輩は、テーブルに足を掛けて店主に罵声を上げた。

「...すみません、お待たせしました...」

店主は、腰を低くしてガラの悪い客の前に現れた。

「.....ビールが飲みたい！つまみは適当に持ってこいや！」

輩は偉そうに注文して、店主は逃げるように去って行った。

輩二人が現れたことによって、店内に嫌な空気が流れた。数人の客は、脅えて早く店を出ようと食事のペースを上げていた。リカたちはたとえば、何も気にせず楽しく雑談していた。

「よ～姉ちゃんたち、こっちで一緒に食事せえへんか～お酌してや～」

また輩がリカたちに声を掛け、割って入ろうとしていた。彼女たちは無視しようとしたが、彼らのナンパはしつこいものであった。一人の輩が、リカたちに強引に迫ろうとしていた。

「こっち来いって言ってるやろが！」

輩の一人は、リカの腕を引っ張り、無理やりに自分たちの席に連れて行かせようとしていた。

「...ちょっと止めて下さい！」

リカは大声を発して抵抗したが、輩は腕を放そうとしなかった。周りの客は何食わぬ顔で食事をしていた。このまま彼らの嫌がらせが続くと思いきや、ある変化が起ころうとしていた。

「！！！」

その時、座っている輩の表情が豹変した。彼は顔色が悪く、大量の汗を流していた。彼の目線の先には、エリが居た。彼女と顔を合わせると、それは恐ろしいものであった。彼女は、鬼の形相で輩を睨み付けていたのであった。エリは言葉を発さず黙ったまま、輩を威嚇していた。また、リカの相手をする輩も様子がおかしかった。リカは彼の腕を握り返しているのだが、とてつもない力で握り、輩の腕がみしみしと音を立てていた。

「...何や...こいつ？」

輩は握られた腕をはらおうとするが、ビクともしなかった。

「...もう嫌がらせを止めると約束するなら放しますよ...」

リカは、平然とした顔で輩に告げた。

「.....く.....分かったよ、悪かったよ、もう放してくれ...！」

輩が素直に謝ったことにより、リカは腕を放してエリの怖い表情が和らいだ。

「...何やねん、こいつら？おっかないわ～」

リカに握られた輩の腕を見ると、赤く変色していて手の跡がついていた。

輩たちは、リカたちの迫力に押されて引き下がり、大人しくなった。居づらい空気は去って行き、周りの客はほっとしていた。店主もそのことに気づき、リカたちにさりげなく頭を下げた。

「...あれ？餃子なんて頼んだっけ？」

「...それはサービスです、というかさっきのお礼です...お気になさらず...」

「...はい、わざわざすみません」

「...ではごゆっくり～」

店主は、輩たちに聞こえないようリカたちに囁いて去って行った。

「...ほな、頂きますか～」

「頂きます！」

リカたちはようやく食事になりつけ、嬉しそうに頬張っていた。輩たちは、その姿を舌打ちして面白くない顔で見ている。それから彼らにも注文していたビールが運ばれて適当に飲もうとしていた。

「...ちっ、今日はついてないな～、稼ぎは少ないし...仲間も一人パクられたし...」

「...最近、サツの取り締まりが厳しくなったな...今月はこれで何人目かな...？」

輩二人組は、何やらきな臭い話を始めていた。食事をするリカたちは、彼らの怪しい会話を耳

にして気にかけていた。

それから数十分経ち、頼まれたメニューを完食したりカたちは一息つき、勘定の準備をしていた。

「割り勘でいいよね～？」

「はい、大丈夫です」

「...経費で落ちないもんかね～」

エリは、ブツブツ文句を言って財布からお金を取り出した。

「.....さて酒もあんまり美味くないし、出るか...そろそろ連絡が入るかもしれへんしな...」

「.....文句言うてる割には結構飲んでるやないか...支払いはどうする？」

「...そうやな、この店、カードは無理そうやし...現金はたいしてないな～お前は？」

「...俺もたいして持ってない.....ただ...」

「...！」

輩二人組は、何やらひそひそと話して勘定を済ませようとしていた。彼らの後ろには、鋭い目を光らせたリカたちが並んでいた。

「それでは四二五〇円頂きます...」

店主が勘定金額を告げると、輩の一人は汚い財布から一万円のお札を一枚取り出した。これでお釣りをもらおうとする魂胆であったが、店主は渡されたお札を見た途端、目の色が変わった。

「...ん？ どうした？」

輩の一人が店員に尋ねると、店主は払われたお札を黙って返した。

「.....お客さん、冗談はよして下さい...そんな玩具は受け取れませんよ...」

「！！」

店主はにこやかに答えたが、若干怒りの感情がこもっていた。輩は焦りだし動揺していた。

「...な...何やワレ！これが偽札とでも言いたいんか？」

輩が逆上し始めるが、店主は全く怯むことがなかった。

「.....ちゃんとしたお金ないんですか？払えないなら警察に通報しますが...」

「くそ...言わせておけば！！」

輩の一人は、怒りが込み上げて店主に襲い掛かろうとしていた。

「！」

輩一人が腕を振り上げた時、何やら違和感があった。彼は腕を自由に動かすことが出来ず、引っ張られているようでその感覚には覚えがあった。

「...お前は！」

輩が後ろを振り向くと、リカが怖い顔で睨み付けていた。リカは、また輩の腕をとてつもない力で握っていた。輩は、力を入れて抵抗するがびくともしなかった。徐々に彼女は力を強めていき、彼の腕の骨は折れそうであった。

「いででででで！止めろ！放せ！！」

「...放したら店員さん襲う気でしょ？それでその隙に逃げるわけだ...もうお見通しよ...」

「...このアマ.....！」

もう一人の輩が反抗しようとするが、その時、鋭利な刃物が背中に突き刺さったような感じがして、彼は恐怖でなかなか後ろを振り向こうとしなかった。彼の背後には、殺気に満ちた目で睨み付けているエリが立っていた。

「.....さて、警察の世話になるか、私たちに世話してほしいか、どっちか選びな...」

エリは輩の一人と肩を組み、男役の声のトーンで囁いた。輩の男は、恐怖のあまり、ビクビクと体を震わせて、それはまるで蛇に睨まれた蛙であった。

「.....お客さん、もうそれくらいにしてあげて下さい...他のお客さんの迷惑になる！」

店主の一声で、リカたちは輩を自由にした。彼らにはもう反抗する元気がなく、両膝を床について観念した様子であった。

「...何かこいつら、最初から怪しいと思ってんたんだよね～」

「...堅気ではないのは十分にわかりましたが...やはりヤクザ屋さんでしたか...」

輩の開いた襟元を確認すると、入れ墨がちらっと見えていた。それから数分後、警官が店に現れて二人組は連行されていった。

「助かりましたわ～なんとお礼を言ったらいいか...」

「...いえいえ」

リカたちは爽やかな笑顔で応対した。

「...それにしても美人やし、格好いいですな～何の仕事してるんですか？」

「.....まあ一応...舞台役者を...」

「...そうか、やっぱり...あの...もしかして歌劇団の...？」

リカたちは、店主の問いに照れながら頷いた。

「...いや～どっかで見たことあるなと思ったんですけど、最近よくテレビとかで見ますわ～最近の男より遅いんですな～」

店主は一気にテンションが上がり、リカたちに夢中になった。

「...すみません、私たち急いでるんでそろそろ.....」

リカたちは、申し訳なさそうな顔でその場を立ち去ろうとしていた。

「.....そうですか、残念やな～訊きたいことがいっぱいあるんやけど.....例えば裏でどんな仕事をしているの...とか.....！」

「！！」

その時、リカたちの体が自然に硬直した。

「.....あんた何者や？」

エリは、恐る恐る謎の店主に質問した。

「...また会ってくれたら正体を明かそう...もし、時間があれば閉店後にもう一度店に来てくれ...来て損はないと思う...」

謎の店主の口調が変わり、リカたちは彼の言うことに大きく頷いた。

「それじゃあご馳走様でした...」

「はい、またの来店お待ちしております...」

その後、何事もなかったかのようにリカたちは中華料理店を後にした。

「...どう思います？あの店主...」

「...さて悪い人じゃないと思うけど、只者じゃないね...私たちの助けは要らなかったかも...」

「...ええ、今晚あの店に行きますか？」

「勿論や！鍵を握るのはあの店主かもしれん...」

リカたちは夜になるのを楽しみにして、繁華街に足を運んだ。

リカたちは神戸に遊びに来たわけではなく、停泊している謎の船の正体を突き止めるという使命がある。有力な情報を掴むため、彼女たちは港の方へと向かった。

まず、リカたちは神戸港中突堤の袂に建つ展望用の塔、ポートタワーに向かった。リカたちは展望台に昇り、観光客やカップルが神戸の美しい景色を目に焼き付けている中、彼女たちは観光客を装って、望遠鏡で辺りを見渡した。彼女たちは遊覧船ではなく、輸送船が入港、出港しているエリアを集中して見ていた。

「...う～ん、ここからじゃよく分からんな～船の特徴は...」

リカたちは、スマートフォンに保存してある不審船の画像を見て確認するが、それは何処にでもある地味な輸送船であった。

「...どれも同じに見えますね...こら困った...」

「...停泊している場所もはっきり送られてきてない...待つ時間もないし、自力で探すしかないか...」

「...そうですね...」

二人は標的を発見することは出来ず、表情を曇らせてポートタワーを降りた。

リカたちは情報収集するため、長年、神戸に住んでいる者が集まる地域に聞きこみに行こうとしていた。その中には情報屋も紛れていて、公安によく協力していた。さらに彼女たちは貿易商の人間と接触し、地道に手掛かりとなる情報を集めていた。気づけば、日が沈もうとしており、街の鮮やかな光が照らされ、神戸の美しい夜景が姿を現した。リカたちはあちこち歩き回り疲れ果てていた。

「...さて今日はこの辺にしとこか～」

「...はい、さすがに疲れました...予約してあるホテルで一泊しましょう」

「うん.....おっと、その前にまだ寄るところがあったね～？」

「...あっそういえば...」

二人の頭の中には、昼間に会った謎の店主の姿がよぎった。彼女たちは再び中華街へと戻った。

リカたちが店に着いた頃、丁度、店主は店を閉めようとする最中であつた。

「...おっ」

店の看板を片づけていた店主は、リカたちに気づき温かく出迎えた。

「...どうも今晚は～夜分失礼します～」

「...よく来てくれたね～さあ入って...」

リカたちは、店主に出迎えられカウンター席に腰を下ろした。

「...早速ですが、なぜ私たちに興味を？ただの歌劇団ファンとは思えませんが...」

エリは、まっすぐな目で店主に質問を投げ掛けた。店主は二人に冷茶を用意し、招いた理由を答えようとした。

「.....昼間の小悪党どもの相手をする君たちの姿を見て、なんか懐かしく思ったんだ...僕と同じ匂いがした...ただそれだけのことだ...」

その時の店主は、関西弁ではなく、落ち着いた標準語を発した。

「...あなたは一体？」

「名は米田博之.....元刑事だ...公安でも働いていた経験がある...君たちもそうだろう...？」

「...公安...！」

リカたちは米田の衝撃の言葉を耳にして、しばらく開いた口が塞がらなかった。

「...ここには仕事で来たんだろう？いいネタは見つかったかな？」

「...まさかOBだったとは.....気づきませんでした...」

エリは、呆気にとられて素直に驚いていた。

「...今は引退されて、飲食業をしてるわけですか？」

「ああ、もう退職して半年ほど経つんだが、今は中華料理店を営みながら副業で情報屋をしていてね...」

「...何でまた神戸で？」

「僕は東京出身だが、なぜか関西での仕事、特に、ここ神戸の出張勤務が多かった...第二の故郷と言えるほど街にも馴染んでいき、居心地がいいんで退職後、移り住むことにしたんだ...もう関西弁はマスターしたつもりだ...上品な方も下品な方もね...関西人役でドラマに出れそうだよ...」

米田は、冗談を交え現状を述べた。

「...成程、店には昼間のような連中がよく来るんですか？」

「...ああ、市内に暴力団の事務所があるからね...少しずつ勢力を伸ばしている...悩みの種だ...君らにちよっかいを出した二人組は、大きな組織に属しているが、まだ新米で雑魚だ...僕も力が衰えた...あんな小僧、ちょっと睨み付ければ、腰を抜かせてお漏らしさせたものだ...」

「...今でもすごい迫力ですよん！」

エリは、お世辞抜きで米田を褒めた。

「...ありがとう、それにしても昼間の君たちの動きには驚いた...かなり優秀のようだね...」

「...いえ、それほどでも...そちらこそよく偽札だと分かりましたね...！」

「...ああ、よく偽札造りの事件を追っていたからね...しかし、最近のは精巧に出来ていてね...ATMや両替機には問題なく使用出来るほどだ...」

「...そうなんですか！」

「...ここ数日、偽札があらゆる場所に出回っていてね...地元の警察は、総動員で捜査している...」

「...今日捕まえたあの二人組が、何か知ってるのでは？」

「...いいや、奴らは本当に下っ端だ...ただ受け取っただけだろう、雑魚に持たせれば足はつかないわけだ...」

「...なるほど、本当に気味が悪いですね...」

「ああ、これは推測だが、とても暴力団だけで行っている犯行とは思えない...」

米田は引退したとはいえ、刑事としての熱意は消えていなかった。

「.....この辺のことはかなり詳しくそうですね...」

「...ああ、もう庭みたいなものだ、毎日あらゆる情報が流れるように入ってくる...ここの署の連

中に飲み友達が多く居てね.....それで君たちは何を追っている？」

「.....ある一隻の船を追ってまして...」

リカは、米田に追っている不審船の画像を見せた。

「.....ふーん、何処にでもある貨物船のようだが...どういった事件性が？」

「.....所属不明の船で、調査に向かわせた職員が帰ってこないんや...不法入国している外国人が絡んでいるみたいやけど.....恐らく、彼らの身に何かあったのではないかと原因究明しているところや...」

「...そうか、確かにこの街は外国人が多い...比較的多いのは中国人系...京都と違って観光よりビジネスでよく訪れている...なんといっても貿易が盛んだからね...」

「...貿易商の人から聴きだしたんですが、ここ最近、うまい話をして貿易会社を騙す被害が多発していて、次々に潰れてるようです...原因を問うと、不正取引が発覚して、いつの間にか銃器や麻薬の密輸に加担していることになっていると...」

「.....その話、耳にしたことがある...捜査線上で中国人犯行グループの名が挙がったが、捜査をするも問題の貿易会社はこの世に存在しない幽霊会社...かなり難航しているようだな」

「.....ええ、私たちが追っているものとの関係があるかと思ひまして...」

「.....そうだな、よし調べてみよう、僕のSNSには情報屋仲間から色々と情報が入るようになっている...関連したものを探ってみよう...」

「ありがとうございます！」

リカたちは、公安課OBの米田の力を借り、手掛かりを掴もうとしていた。

「.....おっ関連した情報があったぞ.....先週の火曜日に入港した中国所属貨物船が一隻...」

「...ああ、確かに追っている船と似ている...大きさや色も...」

エリは、SNSの画像と自分が保存している船の画像を見比べていた。

「...近くには車が数台停まっているが...やたらがっちりとしたスーツ姿の男が立っている...護衛

だな」

「...彼らは何者...？」

「.....この街を牛耳る巨大組織のヤクザのようだ...見覚えのある男の顔が映ってる...幹部もぞろぞろ...」

「...何とも物騒やな～」

「...これをマークしましょう...次に入港する時間とか分かりますか？」

「.....そうだな、不定期のようだが、週に一回、火曜日の午前の時間が多いようだ...つまり明日！場所は新港突堤・新港東ふ頭...賭けてみるか？」

「...明日なら好都合や...私たちにはのんびり捜査する時間がないんでね...明日の朝が勝負や！」

エリは気合を入れて笑みを浮かべた。

「...それじゃあもうホテルに戻りましょうか...明日の朝も早いわけだし...」

「...そうやな～ありがとう、おっちゃん」

「...あ.....ああ、力になれてよかったよ...また何かあったら言ってくれ...」

「はい、ではお休みなさい...」

リカたちは米田と熱い握手を交し、その店を後にした。有力な情報を手に入れた彼女たちは、ひとまず捜査を取り止めた。

秘密警察の一員であるリカとエリは、公安の任務により、神戸で起きた犯罪事件を追っていた。彼女たちは、偶然出会った元公安OBの米田から有力な情報を入手することが出来て、翌朝の決戦に備えて神戸港近くのホテルで一泊することとなった。

そのホテルは、周り二七〇度が海に囲まれたロケーションで、三百三十一室全てにバルコニーを完備。汽笛の音と潮騒が、まるで船で旅をしているかのように感じさせるものとなっている。

リカたちは、チェックインして自分の宿泊部屋を確認し入室した。すると、室内にそれぞれの荷物が届いていた。送り主の見当はついていて、彼女たちは躊躇せず中身を確認した。中にはまず封筒が数枚入っており、開けると今回の任務に関連した資料が入っていた。

さらに底には頑丈そうなケースが一つあり、中を覗くと銃と弾倉が入っていた。それはリカが愛用している武器であった。エリにも裏の仕事で愛用している刀が届いていた。これでようやく準備万端になったのであった。

荷物をひとつどおり確認した二人は、お腹を空かし、ホテル内のレストランで食事をすることにした。彼女たちは肩の力を抜き、レストラン自慢のフルコースを堪能していた。

「...どうにか落ち着いたね...」

「...ええ、米田さんが居なかったら大変でしたね...」

「...そうやな、あの人が信用出来るわ...」

リカたちは、セットのワインを口にして安堵の表情を浮かべていた。

「...しかし、こっちの仕事が終わっても休まれへんな〜」

「...師匠、公演予定は？」

「今月は東京の方であるんや...稽古中に呼ばれたからびっくりしたわ〜初日近いけど、まあ何とかなるやろう...あんたの方は？」

「...来月に本拠地であるんですよ...例のフランス革命の...もう本格的な稽古は始まっています...」

「...そうか、去年、私もやったな〜サイドストーリーだけど...丁度、トップお披露目やったな

～…特別公演の時はお世話になりました…」

「…いえいえ、こちらこそ…」

リカたちは、自然と本業である舞台の話を持ち出した。

「…それにしてもリカは成長したよね～久々に共演して思ったわ……」

「…そんなことはないですよ、まだまだ未熟で…お恥ずかしい…」

リカは、エリに褒められたことで照れて頬を赤く染めていた。さらにアルコールも入っているため、彼女の体は茹蛸状態であった。

「…男装の麗人ええな～私もやりたかったわ～」

「いいですね～お似合いだと思いますよ…！」

「…それ本気で思ってたの？」

エリは疑いの目でリカを見ていた。それに対し、リカは愛想笑いで誤魔化した。冗談を交え、リカたちはお互いのことを色々と話そうとしていた。

「…ところで、師匠は今年の夏で退団されるんですよね…？」

「…そうや、会見を済ませると少し気が楽になるもんやな…記念行事も終わったことやし、あとは全力疾走で突っ走るだけや…」

「…師匠はいつも元気ですよ…エネルギーが満ち溢れてる…ほんと辞めるのが勿体ない…」

「……………」

その時、エリの表情が曇っているように見えた。

「…どうされました？」

「…いや、大変ありがたいけど、私は皆が思ってるほど強い人間やないんや…」

「…そんなことはないでしょう、素晴らしいですよ…」

リカは、いつもと様子が違うエリに驚いていた。

「...私は器用な方じゃなくてね...ただ誰にも負けない意地はある...それで今までどうにかやって来た...かなり前に辞めようと思ったことがあったけど、そんな時に軌道に乗りだし、トップスター就任の話が舞い込んできたわけや...」

「...それにしても就任してからそんなに経ってないから...まだ早いのでは？」

リカは、率直にエリに疑問を投げ掛けた。

「...その台詞...同期のマユにも言われたな...自分こそ早いんじゃないのと言いつたけど...」

「...お二人が去って行くのは、本当に残念です...」

「...リカは優しいな.....あんたの人柄に免じてある秘密を教えたろか？」

「え？」

エリは、改まってリカに何かを語ろうとしていた。

「.....実はな、ここだけの話...私は病に侵されてる...」

「.....！！」

リカは、エリの衝撃の一言で咽ていた。彼女は急いで水を含み、どうにか落ち着こうとした。

「.....師匠、また騙そうとしてるんですか？人が悪い...！」

「...嘘やないで、ほんまに病気なんや、こう見えてもな...」

「...信じられませんね、どういった病気なんですか？」

「.....たまに息切れするんや、最初は疲れから来てるんやと思ってたけど、徐々にひどくなって発作が起こって息苦しくなる時がある...検査の結果、心臓に問題があるみたいや...長時間の運動は禁物...えらい爆弾抱えてもうた...はは」

「...笑ってる場合ですか！よくそれで仕事続けてますね...」

「...今はどうにか体が持つてる...でもこのまま仕事を続ければ命に関わる、だから退団を決めたんや.....次の大劇場公演で三作目...私は三作品に全ての力を注ぐつもりや...舞台上で倒れるのが本望なんて大げさやけど...それぐらいの気持ちで挑まないとな...」

リカは、エリの熱い眼差しに圧倒された。

「.....どうやら本当のようですね...」

「...やっと分かってくれたか...」

「.....裏の仕事はどうするんですか？」

「.....少し休養したら復帰するつもりや...表の仕事もまだ未定...ゆっくり考えるわ...」

「.....無理しないで下さい、体が資本ですから...表も裏の仕事も...」

「...ありがとう、あんたと仕事が出来てよかった...出来れば舞台の仕事でまた一緒になりたかったけど...」

リカたちは自分たちが若手だった頃の思い出話で盛り上がっていたが、翌朝のことを考えて適当に切り上げた。

その時間、もう夜遅くレストラン内は客の数が少なかった。数人の客しか居ない静かな空間でリカたちは食事をしていただけだが、彼女たちの近くで一人、全身黒づくめの人物がワインを飲んでおり、何故かりカたちに視線を向けていた。

怪しい人物であったが、リカたちは一切気にすることはなく、適当な時間にレストランを後にした。

「それじゃあ...明日は早いからよく寝ときや...」

「はい...お休みなさい...」

リカは入室後、軽くシャワーを浴びてから朝に備え、仮眠をとろうとした。

こうして夜は更けていき、運命の朝を迎えようとしていた。

空がまだ薄暗い中、リカたちはモーターボートを借りて、新港突堤・新港東ふ頭へと向かった。しかし、標的の船はまだ停まっていないようであった。彼女たちはしばらく待ち伏せしよう

した。

「...どうやら一番乗りのようやな...」

「奴ら姿を現すでしょうか?...」

「それが分かれば苦労せえへんわ...この仕事はほとんど賭けみたいなもんやからな...あかん時はあかんわ...」

「...そうですね」

「...まあ気長に待とうや、時間はあるんやから...」

「...はあ、さすが師匠、余裕あるな、それともマイペースなのか...?」

リカは、エリを少々呆れた顔で見ている。

「...こうボケツとしているのも時間が勿体ないな...」

エリはそう言って、自分の鞆からあるものを取り出そうとしていた。

「...師匠?」

リカがきょとんとしている中、エリは魔法瓶を一本出して、プラスチックのコップに中身のものを注いだ。

「...私の淹れたお茶は天下一品や~疲れがとれて頭も冴える万能薬や~騙されたと思って飲んでみ~」

「...はい」

リカはエリに強く勧められ、一口含んだ。

「...どうや?」

「...美味しい...美味しいですね、これ!」

「...そうやろ、色々とブレンドしたご自慢の茶や...最近、お茶にはまってるんや~ほら茶菓子

もあるで～」

リカはエリの意外な趣味を知ることとなり、即席のお茶会は和やかに行なわれた。そうしている間に半時間経ち、ようやく動きが見え始めた。

リカたちが待ち伏せているふ頭に、数隻の白いクルーザーが停まり、中からサングラスを掛けた厳つい男たちが続々と姿を現した。

リカたちは、そっと双眼鏡で現場を覗いていた。

「.....あの連中は？」

「...どうやらヤクザ屋さんのような...元公安部のおじさんにもらった画像と一致する.....ほら出てきたで親玉が...」

「情報によると関西を拠点としている金龍組だわ、ほら、あの一番でかいのが若頭、葉巻を吸ってるのが組長や、何か良からぬことが始まりそうやね」

「.....何か取引が？」

「...そうかもね.....あれ？あの中に知ってる顔が紛れているな...」

エリは、予期せぬことに驚愕して自分の目を疑った。

「...師匠、どうしました？」

「.....こらスクープや、身内が居てる...組長と喋ってるあの男...兵庫県警の幹部や...顔を合わせたことがある...間違いない！」

「...そんな」

リカたちは、思わぬ事態に遭遇して、より緊迫感に包まれた。そしてまた、災いが降り掛かろうとしていた。

「.....あの船は？」

クルーザーが到着した数分後、また新たな船がふ頭に近づいて来ていた。その船は古い大型貨物船であった。

「...まさかあれが...！」

「...そうや、標的の船や！やっとお目見えや...面白くなってきた...」

リカたちは、あまりの興奮と緊張で若干体が震えていた。これで役者が揃い、騒がしい朝を迎えようとしていた。

錨が降ろされ、停船準備が済み、ついに乗員の顔を拝むこととなった。

リカたちは、しばらく様子を見ることにした。すると、船の中から生真面目そうな細身の男が乗組員に囲まれながら現れた。彼らは中国人であった。暴力団の関係者は、中国人グループと厚く握手を交して何か会話していた。そして、お互い物々交換をしようと準備していた。まず大柄の組員が、二人がかりで重そうな木箱を運び、中国人乗組員に差し出した。

箱の中を覗くと、様々な種類の銃器が山積みとなっていた。乗組員はその銃器を念入りに確認している様子であった。リカたちは、証拠として取引現場の写真を撮り続けた。

「...やはり危ない取引のようやな...」

「...ええ、色々と絡んでるみたいですね」

リカたちが監視する中、次に金龍組の組員はジュラルミンケースを運びだし、その中を覗くと、白い粉状のものが入った小型のポリ袋とビニール製の袋が大量に見えた。乗組員は、それらも念入りに確認していた。

「...あの白いのは恐らく麻薬かと思うけど.....もう一つの銀袋が何か分からないな...」

リカたちは監視しつつ、標的と少しずつ距離を詰めて行った。金龍組は見せるものがなくなり、今度は中国人グループがあるものを差し出した。金龍組が用意したアタッシュケースの中には、札束が入っていた。

「.....あれ？日本のお札...？」

その時、エリは何か引っ掛かる様子であった。

これでひとまず怪しい取引は終わったようで、リーダー格の人間が抱擁を交わした。標的の笑い声が響く中、リカたちはついに動き出そうとしていた。

「私が先に出るわ、そのあとにあなたが出て、銃を構えて威嚇して.....ってあれ？」

エリが先頭に立って進もうとしたが、後輩のリカは既に彼女の前に居た。

「き...貴様、何者だ？」

リカが罪人たちの前に現れて、一気に現場は騒然となった。

「.....警察の者よ...無駄な抵抗は止めて大人しくお縄につきなさいな...」

「...つまらん冗談を言う御嬢さんじゃないか...ああ？」

金龍組の若手が、リカを睨み付けて軽く挑発した。彼女は、全くそれに動じなかった。

「...動くなって言ってんのに分からん人だな～」

リカは、中年男性のような口調で若手組員に話し掛けた。若手組員は、リカの態度に苛立っている様子であった。

「.....女やからって容赦はせえへんぞ！」

「.....ドン！！」

若手組員はリカに襲い掛かろうとするが、彼女は瞬時に愛銃を抜いて引き金を引き、撃たれた弾は彼の頭をかすめた。

「...あ...あ...が...」

撃たれた若手組員は、口を大きく開いたまま腰を抜かしていた。

「.....どうやらそれは玩具でないようだな.....」

金龍組の若頭は、リカの強さを察し、周りの部下に注意を呼び掛けた。

「...さて、もう抵抗するお馬鹿さんが居ないなら、このまま皆について来てもらうけど...」

「...皆というのは、我々と彼らのことを言ってるのかね？」

その時、金龍組の組長が上品にリカに訊ねた。

「...ええ、中国のお友達も同行してもらおうわ...彼らにそう言ってもらえる...？」

「...我々を逮捕する気かね？罪名は...？」

「...よくもまあそんなドヤ顔が出来ますね～証拠は全てそこに並べてあるじゃないの～なんかあくどい取引やってんじゃない...その武器と麻薬...中国の友達に売り飛ばす気でしょ...？ちゃんとこの目で現場を目撃したわよ...」

リカは強気な姿勢で、大勢の強面の男たちに立ち向かった。

「.....よく嗅ぎ付けたな...勇気は買うが、君一人黙らせることはどうってことない...」

組長たちは、何も恐れずリカを脅した。

「.....二人ならどうにかなるんじゃないの...！」

「！！」

その時、格好よく登場するタイミングが分からなくなったエリが、現れた。

「.....貴様、仲間か？」

「...ああ、そうや、勝手に動く後輩持つと苦労するわ...」

エリは、呆れ顔で嘆いていた。

「...すみません、結構せっかちなもんで...」

リカは苦笑いを浮かべて、エリより一步後ろに下がった。

「.....くそ、なめんなよ！くそガキども！」

組員たちはもう我慢できず、怒りが爆発した。リカたちは、あっという間に武装した者たちに囲まれていた。

「...始めからこうすりゃよかったのよ...ほんとに無駄に喋らせといて.....」

「.....あんた、なめられてるんやで...やっぱり私が先に行けばよかったんや...」

緊迫した空気に包まれている中、リカたちは冷静であった。

「...やれ！！」

金龍組の若頭の合図で、組員と中国乗組員はリカたちに攻撃を仕掛けようとした。

「ドザザザザザ.....」

「？」

気がつけば、十人程の金龍会組員たちがドミノのように倒れていった。

「...峰打ちじゃ、安心せい！」

エリは、時代劇の主人公のようにきざな振る舞いを魅せた。エリの太刀筋は全く見えなかった。

「...ちゃんと私の分も残しといて下さいよ～」

「...こんなもの早い者勝ちや...丁度、殺陣の練習にええわ～」

エリは、呑気に話しながら次々と相手をしていき、彼女が歩いた後には敵が多く倒れ込んでいた。

リカも負けず劣らず、得意の早撃ちで敵を倒していった。彼女は急所を狙わず、腕や足を狙って撃ち続けて戦闘不能にしていた。彼女たちの活躍で瞬く間に相手の数は半分以上倒されていた。

中国乗組員たちも苦戦を強いられ、一目散に船に戻って行った。

「...！」

中国乗組員たちはそのまま逃げだすかと思ったが、すぐに外に出てきた。彼らはバズーカ砲や重火器を手にしていて、ふ頭上は、それで一気に戦場と化していた。リカたちは、猛攻を受けて隙を作ってしまった。

「...ち、間に合わない...」

乗組員たちはリカたちに照準を合わせ、一斉に引き金を引こうとした。ここで万事休すと思われたが、リカたちは何故か助かることとなった。

「!？」

突如、バズーカ砲が誤爆したり、武器を構えた者たちが次々に倒れていき、瞬く間に全滅となった。リカたちは、啞然として棒立ちであった。

リカたちを助けた者は、争っている場所から百メートル離れた場所にあるコンテナの物陰に隠れていた。その人物は昨夜、リカたちが泊まったホテルのレストランに居た謎多き黒ずくめであった。

黒ずくめは、ライフルを構えて陰からリカたちを援護しようとしていた。これにより、一気にリカたちは優勢となった。劣勢に陥った中国乗組員たちは、船に乗り込んで逃げようとしていた。それを阻止すべく、リカは外をエリに任せて一人で貨物船に侵入した。

船内でも激しい銃撃戦が起こり、それをかまわず貨物船は逃げようとしていた。しかし、貨物船の周りは何やら騒がしくなっていた。

「...間に合ったか」

エリは今の状況を見て、安堵の表情を浮かべた。ふ頭の上空には、警察専用ヘリが飛んでおり、海上には警備艇が包囲していた。これにより標的の逃げ場は無くなった。リカは操舵室に向かい、舵担当の男に銃を突き付けて停めるよう指示をした。

隠れて援護していた黒ずくめは、ライフルを片づけていた。

「.....やれやれ、世話が焼ける連中やな」

黒ずくめの正体は、何を隠そう歌劇団トップスターのマユであった。彼女もまた極秘任務でこの件に参加していた。マユは、リカたちと顔を合わすことなく、その場を静かに去って行った。

完全に包囲した警察隊は、ただちに金龍組のクルーザーと中国貨物船の中を調べようとした。クルーザーの宿泊部屋のクローゼットを開けると、人影が見えて、その正体は金龍組の組長と兵庫県警の幹部の一人であった。彼らは身を小さくして震えており、なんとも情けない姿であった。船内をくまなく調査すると、至る所に札束や麻薬が隠されていた。

「...今回の件、本当に感謝するよ、急に捜査を打ち切られ困っていたが、理由が分かった.....まさか身内が関わっていたとはな...情けない」

現場担当の刑事は、頭を抱えてながらエリに話し掛けた。

「...確かあの人...刑事部長の菅井さんですよ...一度、顔を合わせたことがあります...」

「...ああ、彼は同期だね...根は真面目な方だと思ったが、分からないものだな...実に残念だ...」

「.....これで一応事件は解決でしょうか？」

「...ああ、すっきりした...これで捜査が進められる...ありがとう！」

刑事は、切実な気持ちでエリに対して感謝の意を述べた。

一方、中国貨物船の船内も調査が進められ、そこにはリカが居た。

「.....何これ？戦争でもする気？」

保管庫を開けると多くの銃器、兵器が保管されており、ミサイルなど大量殺戮兵器なども紛れていた。輸入禁止とされるものが次々と発見される中、気になったのは偽札の原盤であった。金龍組が受け取ったお札は、この原盤で刷られた偽札であり、最近出回っている偽札かどうか調べる必要があった。さらには日本円だけではなく、世界中の偽札の原盤が置かれていた。それらは、全て押収されて捜査はひと段落した。

気がつけば夕刻となっており、リカたちはようやく裏の仕事から解放されようとしていた。

「...ふーどうにか期日に間に合ったな～」

「...ええ、これで一安心です...」

今、二人が居る場所は、JR新大阪駅の構内であった。

エリは東京での公演があるため、新幹線の切符を購入していた。まだ時間に余裕があるため、リカたちは駅構内の飲食店で夕食のラーメンを啜っていた。

「...師匠、大丈夫ですか？もうあまり休む時間がないのでは？」

「大丈夫や、新幹線でぐーすか寝るし...」

「...そうですか」

「.....にしても今朝のあんたの活躍ぶりには驚いたわ...まさか私の前に立つとは...」

「.....すみません、生意気な真似して...」

「いやいや、全然気にしてへんで～立派、立派、あんたみたいな後輩がおって頼もしいわ...」

「ありがとうございます...でも途中で敵がバタバタと倒れていったのは何だったんでしょうか？」

「.....あーあれね、さあ何やったんやろ？多分応援に来た警官隊やと思うけど...」

エリは薄々、マユの存在に気づいていた。

「.....そろそろ時間ですね、ホームに行きましょうか...」

「...そうやな」

リカたちはラーメンのスープを飲み干して、ホームへと向かった。

「世話になったな」

「...いいえ、こちらこそ」

「公演頑張りや」

「...はい！師匠も体に気を付けて...」

エリの乗る新幹線の発車時刻となり、二人は手を振ってしばしの別れを告げた。新幹線のライトの光が小さくなっていき、リカはエリの見送りを終えた。

「さてと...」

リカは何故か、まだ家に帰ろうとしなかった。彼女は大劇場方面行きのホームへと向かった。大劇場の最寄駅に着いた頃は、もう真夜中であった。リカは、用事で大劇場に向かおうとした。

「...！！」

リカは静けさが漂う花園を抜けて、会社側の出入り口を目指そうとするしたが、何か気配を感じていた。いつも歌劇団スターの入り出待ちで賑わう時計台が設置された場所に複数の人影があった。

「.....あなたたちは！」

突如、リカの前に現れた人物により、また新たな波乱が巻き起ころうとしていた。

第六話 才人の葛藤

夜も深まる閑静な住宅街、用事で大劇場へと足を運ぶリカであったが、彼女の前に突如、四つの影が立ち塞がっていた。

「.....あなた方は...！」

リカは、目の前に立っている人物を知っているようであった。

「...こんな夜遅くにご苦労さんやね...一仕事済ませた顔や...」

その時、一人の女性が悠長な関西弁でリカに話し掛けた。

「.....あなた方に会えて嬉しいのですが、どうしてこんな所に居るんでしょうか.....レジェンド四強.....！」

「.....まだそう呼んでくれる人が居るとはね~もうあれから四十年か.....本当に時間が流れるのが早いね~」

そこでまた一人、女性が声を発した。

リカの前に現れた四人は、歌劇団OG、彼女の大先輩であった。『レジェンド四強』（あるいは歌劇団四天王）と呼ばれ人気を博していた。

「.....私に何か御用ですか？」

リカは肩に力が入っていて、ガチガチな状態で四人に話しかけた。

「.....そう緊張せんでいいよ、リラックス、リラックス♪」

リカの緊張を和らげるのは、レジェンド四強の一人、ジュンコ。現役時代と体型はほとんど変わっておらず、退団後は、コンサートやディナーショーを精力的に行っている。

「.....急に驚かせてごめんなさいね、あなたに一度会ってみたくてね...」

次に言葉を発した気品溢れるその女性は、同じくレジェンド四強の一人、ミキ。数々の名作に出演し、華々しい舞台生活を送るスターの一人である。退団後も舞台を中心にした仕事を始めようとするが、病魔に侵され、長期の療養生活を余儀なくされた。

その後、無事に回復した彼女は、舞台の世界に戻り、完全復活を遂げた。現在は、演技指導など指導側に回っている。

「.....私がここに来ることは分かってたんですか？」

「...ええ、今夜逃したらしばらく会えないからね～」

三人目はラン。歌劇団の大作を次々となし、みるみると実力を上げていき、劇団側に頼られるスターとなる。中国籍であった彼女は退団後、日本国籍を取得。自らが主宰するバレエやダンスのプロを育成するスタジオを開校。現在もミュージカルスターとして活躍している。

「先日の祭典のこと話したいけど、また今度にしようか.....ほな、本題に入るで...ちょっと話したいことがあるんや...」

最後の一人、貫禄のあるその女性は、マサヨ。彼女こそ歌劇団代表作初演で男装の麗人を演じた張本人である。若手時代は自慢のダンスで実力を発揮してトップへと順調に登りつめる。退団後も舞台活動して、歌劇団の後輩の演技、ダンス指導にも参加している。

「...私何かしましたか？」

「...まあ聞きや、あることを伝えに来た...」

「はい...」

リカは動揺しつつ、マサヨの話に耳を傾けた。

「.....あんた、今度の大劇場公演控えてるわけやけど、自信はどれくらいある？」

「...え？」

リカは、マサヨの唐突な質問に戸惑ってしまっていた。

「.....まだはつきりしませんが、伝統に恥じないよう努めていこうと...」

「...そんな教科書通りの答えは求めてへんね！どれくらいやる気はあるか訊いてるんや！」

「...まあまあ～」

マサヨはリカのはっきりしない発言に苛立ち、ランがマサヨをなだめた。

「.....去年のあなたが出た公演、観劇したけど、実にお世辞抜きで素晴らしかった...心が震える演技だったわ...」

そこですかさず、ミキがリカの演技を評価していた。

「...ありがとうございます」

「...確かこれも去年のことだけど、男装の麗人を演じたね...?」

「...はい、特別公演で...」

「.....短期間の割にはよく出来たね...」

ジュンコもまた、リカを褒めていた。

「.....確かにあの姿...実に麗しかった...ただ見た目だけや...あれはあくまでゲスト出演...欠けているものはいくつもある...」

そこでマサヨが苦言を呈し、レジェンド四強メンバーは厳しい表情を浮かべた。

「...あなたは素晴らしいものを持っている...でもまだ出し切れていない...今回の公演は、歌劇団五十周年を記念するものだから何としても成功させてほしいのよ...!」

ランは、優しくリカに想いを伝えた。それに対し、リカは返す言葉がなかなか見つからなかった。

「.....実は今回、私が公演の演技、ダンスの指導を務めることになったんや...それで一足早くあなたに挨拶したかった...」

「.....あなたが指導係...!」

リカは、マサヨの迫力に押されていた。

「.....私は自分で演じる時も、人にもものを教える時も、常に全力投球でやってきた...今のあなたについて行ける自信があるか?」

「.....はい」

リカは、負けじとマサヨに返事をした。

「...その言葉信じていいんやな...？」

「...はい！」

マサヨはリカのことを信じ、表情を緩め始めた。

「.....ここで言うておきたいのが、今回の公演、ただの再演ものと思わないことや...」

「...？」

リカが疑問の顔を浮かべる中、マサヨは話を続けた。

「...言うても、初演から四十年...また新たなファンを獲得するにはもう古い手は通用しない...演出家の先生も新しいものを取り入れて、作品を進化させようと考えてるそうや...二十一世紀に相応しい公演を目指している...」

「...二十一世紀に相応しい公演...」

「...そう、今までにない衝撃作、新作のつもりで舞台に立ってほしい...あんにしか出来ない舞台人像を創りあげてほしいんや！」

「.....私にそんな重要な役、務まるでしょうか？」

「...またそうやって不安げな顔になる...あんな、それでもトップスターかいな...？もっと自信持ち！私がきっちり指導するから...」

「...はい、すみません」

マサヨ以外のメンバーは、二人の会話を聞いて子供のように笑っていた。

「...ああ、そうや、これは稽古とは別の話になるけど.....裏稼業についてや、今までは公演と両立してやってきたけど、今回の公演に限り、公安の仕事はしなくていい...これで本業の方に集中出来るやろう...？」

「...はい」

「.....私らの頃は、大作が続いても無理に働かされていたね、当時は本当に扱いがひどかったもんや...」

ジュンコは現役の頃を思い出して、つい愚痴をこぼしていた。

「...とりあえず今後の予定は伝えた.....呼び止めて悪かったね...理事に呼ばれて来たんやろ？」

「...はい」

「.....今日は色々あって疲れたやろ...帰ったらちゃんと眠りや...」

「...はい」

用を済ませたレジェンド四強は、そのまま闇の中へと消えた。リカは、ようやく緊迫した空間から解放された。こうして、リカの新たな挑戦が始まろうとしていた。

運命の稽古当日、リカはいつも通り、規則正しく起きて大劇場へと向かった。

大劇場前には、熱烈なファンが轟然としているスターを待ち受けていた。

スター本人の目の前で、ファンたちは記念に撮影するためにスマートフォンや手持ちのカメラを構えていた。ファンクラブ特有の儀式が終わった後、多くのファンに囲まれて楽屋口で温かく見送られる、これも歌劇団スターにとっては日常である。

歌劇団事務所は、楽屋と稽古場が併設している。楽屋、稽古場前には`着到板、があり、そこには今まで歴代のスターの名が刻まれ、後輩へと受け継がれている。退団すると、白く飾ってもらい、持ち帰ることになっている。

稽古場に向かう途中には事務所スペースがあり、公演作品ポスターがお出迎えとなる。

エントランスホールは、美しい男女のブロンズ像が置かれていて、公演座談会の集合写真でお馴染みの場所でもある。稽古場はいくつかの教室に分かれており、写真撮影用のスタジオも配備されている。

リカたちが所属する班は、四番教室に集合していた。演出家、振付師など指導側と劇団員など

、演者側が顔合わせをして今後の予定を告げられ、ついに稽古が始まろうとしていた。指導側には、初演で主人公を演じたマサヨが腕を組んで座っていた。

リカは作品のヒロインを演じることになり、主に三人の男性と絡むこととなる。

また、その三人の男性演じる劇団員は、役替わりで違った個性を持った男性を演じなければならない。

一人目はヒロコ。リカとは同期で初舞台から班が一緒であったが、急遽、リカは他班に異動となり、お互い別々で修業時代を過ごすこととなった。やがて、リカがトップスターになった直後、再び成長した姿で共演が実現することとなった。彼女は、リカの頼れる兄貴のような存在で、班を支えている実力派である。

二人目はアスカ、愛称はまあ坊。彼女は、フェアリー系と評される男役で、ダンスと演技を得意とし、爽やかで開放的なイメージが売りである。班替えでみるみると成長を遂げていき、主力として活躍している。

最後の一人はクミコ。彼女は、歌劇団のファン時代を経て、入団後、注目の若手スターになった一人である。着々と経験を積み、幅広く与えられた役に挑戦している。

劇団員は自分たちのスケジュールを確認し、上級生は万能のロボットのように作業をこなしていく一方、下級生は演出家の厳しい指導で落ち込み、耐えられず涙を流す者も居た。

リカはそういった環境に十五年以上居て、そのうち十年は、裏稼業と両立して生きてきた。若手ホープといわれた彼女も今や立派な舞台人である、気づけば稽古期間は三分の一ほど過ぎていき、少しずつではあるが、稽古の成果が形になろうとしていた。

ある真夜中、大劇場にもう人気はないように思われたが、稽古場のフロアに一つ人影があった。その正体は、リカであった。

稽古場の教室は全て閉まったため、リカは明かりがついたエレベーターホール付近の広いスペースで自主稽古を行っていた。そこは彼女にとって憩いの場であった。

稽古を始めてから一時間以上経っており、床にはリカの大量の汗が零れ落ちていた。

「...はあはあ.....」

リカの呼吸は乱れつつあったが、目はまだ死んでいなかった。彼女はお経を唱えるかのように

台詞を呟き、イメージトレーニングをしていき、さらには納得いくまで続けようとして、自分の体を痛めつけていたのであった。

「.....ふう、これではまだまだ観客の前で見せられない.....」

リカは苛立ち、既に体力の限界を超えようとしていた。

「...！」

その時、リカは一基のエレベーターが動いていることに気づいて驚いていた。

「.....警備員.....でもなさそうね.....さっき挨拶したような.....一体誰が？」

謎の訪問者を乗せたエレベーターは上昇していき、ついにはリカが居るフロアで停止しようとしていた。リカは生唾を飲み込み、扉が開くのを待った。

「...！！どういうこと？」

リカは訪問者を見た途端、呆気にとられ、一気に緊張がほぐれていた。

「.....ああ、こわ...お化けかと思ったぞ...」

謎の訪問者の正体は、裏稼業の同僚である安藤であった。

「.....あんた何しに来たの？ここが何処だか分かってるの！！」

リカは、驚きのあまり声を張り上げた。それは反響して、フロア全体が震えるほどであった。安藤は、すかさず耳を塞いだ。

「.....まあそう睨むな.....ちゃんと許可は取ってあるよ...報告に来たんだよ」

「...報告？」

「.....ああ、お前はしばらくこっちの仕事に関わることはないからな...こうでもしないと会えないだろう...先日、お前たちが担当した事件について伝えたいことがある...」

「...先日の...ああ、中国の犯罪組織が絡んだ闇取引のことね？」

「.....ああ、あれからどうなったか、知らせに来たわけだ...」

「...それはご苦労なことね...むさ苦しい所によろこそ...」

「.....本当によくこんな気味の悪い場所にずっと一人で居られるな...」

「...どうってことないけど、集中力が高まるわ...」

「...にしても酷い顔だ...少し休憩せんか？ほら、差し入れもある...」

安藤の手には、アイスコーヒーとサンドイッチが入った袋があった。

「.....もう少し続けたいの...話をしたければどうぞ...動きながら聞いているから...」

安藤は溜め息をつき、近くの椅子に腰掛けて話をしようとした。

「.....ニュースや新聞などに目を通している方か？」

「.....ええ、例の闇取引事件もたまに特集してるわね...」

「...あまり当てにしないことだな...正確な情報は流れていないはずだ...詳しく説明しよう...もぐもぐ...」

安藤は、差し入れのサンドイッチをつまみ食いしながら喋ろうとしていた。

「出来るだけ手短にどうぞ...」

「...不法入国してきた中国人の正体は、アジア区域を拠点に活動している闇の商人で、精巧な偽札作りにも手を出している...」

「...ヤクザに出回ってるようだけど...」

「...ああ、何処まで本当か知らんが、ご自慢の偽札を利用して日本経済を陰から操り、破たんさせようと計画していたそうさ...組員は利用されてたわけだ...」

「貿易でもあくどいことしてたから、油断も隙もないわ...」

「そのことだが、例の貨物船は神戸以外でも発見されている...北は北海道、南は九州、今日も大

阪の港で密売人を確保してきたところだ……何よりショックなのは身内が関わっていたことだ…」

「……ああ、何人か居たね…警察内部の人間は何を？」

「…押収した武器や麻薬を差し出し、暴力団とつるんで闇商人と取引していた……偽札の件も一枚噛んでいた…裏の世界だけでなく、表の世界にも広く偽札が出回ろうとしていたんだ…今でも身内幹部の事情聴取が続いている…この件に関して隠蔽を目論んでいたようだから油断大敵だ…これも重要だが、また気になるものが出てきた…」

「気になるもの？」

「…押収品には、麻薬の他に違法薬物が紛れ込んでいた…見た目はハーブのようなものだが、成分を分析すると、これがお茶に出来ない代物でね…催眠・興奮・幻覚・幻聴作用などがあり、痙攣・意識障害・呼吸困難などの重篤な健康障害を引き起こす恐れもある危険なハーブ…耳にしたことがあるだろ？」

安藤は、稽古で動き回るリカを追いかけながら押収品の写真を見せた。

「…ええ、たまにニュースで取り上げられているわね…」

「当初、規模は小さかったが徐々に拡大していき、一般人にも浸透し始め脅威となった…繁華街や閑静な住宅街にも普通にハーブの自販機が置かれている事態だ…値段もそう高くないし、子供の手に渡ってもおかしくない…」

「…私たちが手にしてもおかしくないか…？」

「そういうことだ…いつの間にか身近なものになってしまって、全国の警察が一斉捜査を始めた…ハーブ店が摘発されるがイタチごっこ…通販でも買えるものだからもう手一杯だ…ようやく鈍い政府が動こうとしているよ…」

「…身内の馬鹿は、そんな社会問題になっているものを平気で売りつけようとしていたのね…」

「ああ、もはやこれは日本国内だけの問題じゃない…全世界に浸透するのも時間の問題だ…いくらでもルートがあるからな…」

「…私は心配要らないわ…ある意味、仕事依存症だけど、特に負担がないから…」

「...だろうな、どちらかといえば俺らが危ないかも...お堅い仕事にも流れていると聞くぜ...」

安藤は苦笑いを浮かべた後、自分のアイスコーヒーを啜った。

「.....ふう、今回は裏社会のこと気にせず稽古出来るから気が楽だわ...」

リカは体をほぐし、稽古の仕上げに入ろうとしていた。

「.....それにしてもお前、体の線が細いな...よくそれで動けるな...驚異的な身体能力を持っているのが信じられない...」

「...日ごろの鍛錬の成果よ...体型を維持するのは常識よ...」

「...そういうもんか.....ああそうだ！...お前と組んで任務に就いたエリという女性を見たな...彼女も細いな...マッチ棒みたいだ...優秀だというのは聞いていたが...」

「...彼女と何か話したの？」

「...いいや、別に面識がないからな...偶然すれ違っただけだ...外見から想像するが、お前とはまた違うタイプだな...目力があって迫力がある...何事にも動じないまっすぐ進むタイプだな...」

「...まあ、だいたい当たってるわね...」

「.....彼女もここを辞めるんだろ？」

「...ええ、あの人のことだから全力投球で公演に臨むでしょうね...」

「...ほう、それは観に行きたいものだな...最近やたら、この歌劇団にはまってね...にわかファンに過ぎないが.....お前の舞台も観に行くからな！」

「...はいはい、いつ観に来るかは敢えて訊かないわ...」

安藤は床に置かれた公演の原作である漫画に目が行き、適当にページをめくって、あるページの漫画の絵をリカに見せた。

「.....この金髪の麗人を演じるわけか、お前は...？」

「...そうよ」

「...男装の麗人.....荒れ果てたフランスで生きる悲しい経歴を持った女性軍人.....今のお前と似ているところがあるな...表の世界では男を演じ、裏の世界では命を懸けた危険な仕事ばかり...
...女性としての自由がない...悔いはないか？」

「...私をからかっているの？」

「...いや、真面目なことを語ったつもりだが、うまく伝わらなかったか...」

「...用件が済んだのなら帰ってもらえる？一人になりたいの！」

安藤はリカの鬼の形相に追いやられ、仕方なく退散することにした。

「.....じゃあな、無理すんなよ」

安藤は愛想よくリカに手を振るが、彼女は目を合わせようとしなかった。

「...ふう」

安藤が居なくなったのを確認したりカは、並べられたドミノが倒れていくかのように綺麗な体勢で体を崩した。

「...今日はここまでにするか...」

稽古を切り上げたりカは、安藤の差し入れの袋に手を伸ばそうとしていた。すると、リカはあることに気づいた。

「.....あいつ、サンドイッチ全部食べやがった.....」

リカは、不機嫌のまま帰宅することとなった。

それからしばらくして、稽古日は中盤へと差し掛かろうとしていた。

「...あの...見てもらえませんか？」

熱気が伝わる稽古場で、リカは恐る恐る先輩でもあり、振り付けを指導するマサヨに声を掛けた。

「え？何を...？」

「...ダンスの振り付けを...」

リカは、伝説の振り付けの型が何処まで出来ているか、マサヨに見てもらおうと考えていた。劇団下級生もそれに加わることになった。

「...これ左足、リカちゃん...！」

「はい！」

マサヨのスバルタ指導が始まり、彼女にリカたちの視線が集中して、伝説の振り付けの型が徹底的に叩き込まれることとなった。

「これも上からぐーっと押さえる、これと一緒に同時に押さえるの...階段一段上がってこの幅...前に出ない！真後ろ！」

「はい！！」

足の細かい動きなどがチェックされ、室内にマサヨの怒号が響いた。彼女は後輩たちの覚えの悪さに苛立っている様子であった。リカたち劇団員は、ついていくのに必死であった。

こうして、レジェンド四強マサヨの指導により、初演時の世界が再現されようとしていた。

リカたちには少しも余裕がなかった。稽古期間は半分以上過ぎており、前に進むしかない、先に進めば進むほど壁にぶつかることになる。皆、同じ条件ではあるが、それぞれ実力に差が始めようとしていた。

マサヨが代表作の初演を務めてから四十年が経とうとしているが、彼女の動きに衰えはなかった。伝統を受け継ぐ後輩を信じて、熱く舞台に対する想いを語った。

そして、リカたちは、マサヨの言われた通りにフィナーレナンバーを踊ろうとした。

リカたちは、稽古場の幅いっぱいに移動していき、マサヨや演出家の目の前で華麗に力強く舞った。男役特有の威勢がいい掛け声が飛び交い、リカたちはどうにか踊りきったのであった。

踊りきった彼女たちは、大量の汗を流し、とても息苦しそうで今にも倒れそうな状態であった。

しかし、マサヨの評価は厳しくリカたちに愛の鞭を浴びせた。疲れが顔に出ている若手劇団員がいる中、リカだけは笑みを浮かべて目は生き生きとしていた。ここでトップスターの貫禄を見せつけたのであった。

ここでひとまずマサヨの厳しいレッスンが終わり、劇団員はようやく体を休ませることが許された。

リカは、どちらかといえば器用な人間ではないが、自分のセンスを信じ、とことん粘るところが持ち味である。彼女は伝統を受け継ぐだけでなく、自分にだけにしか出来ないオリジナリティ溢れる麗人を生み出そうとしていたのであった。

通し稽古

四月某日、この日、クライマックスシーンの通し稽古が行われた。

主人公の麗人が愛する男性が、銃弾で倒れるシーン、ここは名場面中の名場面といっても過言ではない。

台詞を言った後、リカの中から大粒の涙がこぼれた。勿論、これは台本にはなく、彼女が感情を爆発して起きた結果であった。

こうして作品は形になっていき、公演初日を迎えることとなった。

月が変わり、五月、ゴールデンウィークから上演されることになった。当然のことながら多くのファンが駆けつけた。ついに幕が開けられ、リカたちの成果がお披露目となった。今回の作品、主人公の誕生から細かく描かれる、さらに新しいシーンが追加され、見せ場は数えきれないほどであった。作品中盤、架空の動物、ペガサスが現れる場面があり、リカが演じる麗人が乗っており、黄金の鎧を纏っているため、なんとも神々しいものであった。ファンなら誰もが知っている場面も忠実に再現され、感動のエンディングへとテンポよく突き進み、悪戦苦闘したフィナーレナンバーの時が訪れた。リカたちは観客を魅了し続けて、無事に公演初日を成功させ、華々しいスタートを切ったのであった。リカたちの限りない努力と成長により、幅広く注目され、各方面から絶賛された。この調子で約一ヶ月公演することとなる、それもあっという間に過ぎていき、何の問題もなく千秋楽を迎え、大劇場は歓喜に包まれた。

この調子で次は東京へと遠征になるが、その前に急遽、衝撃的なことが舞い込んできた。それは大劇場千秋楽から数日後のことであった。ファンが何気に歌劇団のホームページを閲覧していると、最新情報にリカの名前が挙げられていた。

それは退団発表についてのことであった。ついに公式発表され、ファンたちを震撼させた。後日、退団会見が開かれることになり、それが新たな事件の引き金になりつつあった。

第七話 DOMINO 前篇

「……ついにこの時が来たな…緊張しているか？」

「……不思議と落ち着いています…ちゃんと話せそうです……」

「…そうか」

ある待合室で二人の男女が雑談していた。二人は血がつながっていないが、実の親子のように親しい仲であった。

それは六月の上旬のことであった。大阪のホテルの豪華な大部屋で、リカは大勢のマスコミ関係者に囲まれていた。リカは、次の公演で歌劇団を退団することを正式に発表しようとしていた。

「歌劇団トップスター・リカが、来年二月〇〇日の公演の千秋楽をもちまして、歌劇団を卒業することになりました、彼女は入団当時から容姿端麗の舞台人として非常に注目されており、スターの階段を駆け上りました、そして、トップスター就任後は、歌劇団百年の伝統を受け継ぐ正統派として……」

まず歌劇団理事長が口を開き、落ち着いた表情でマニュアル通りに関係者に向けて挨拶をした。

続いてリカがマイクを持ち、挨拶をした。

「来年二月〇〇日の公演の千秋楽をもちまして、歌劇団を卒業する決意をいたしました、今まで応援して下さいましたファンの皆様、また、歌劇団関係者の皆様には感謝の気持ちで一杯でございます……」

その時のリカの表情を見ると何の迷いもなく、ふっきれたようでとても穏やかであった。そして記者からの質問が続いた。

リカは、最後の公演への意気込みや、同じ舞台に立った仲間へ伝えたいことなどを訊かれ、結婚の予定はないとリカが答えると会場内に笑いが巻き起こり、そうこうしているうちに、会見は無事に定時刻に終了した。ちなみに会見時にリカが着ていた服は、`男役の中の男役、と評された主人公を演じた時に着た衣装と同じものであった。

さらに最後の公演となったショーのタイトルには、リカの芸名にちなんだ鳳凰の名が記されており、文字通り集大成の作品となった。何はともわれ、会見時のリカの姿は実に逞しいように思

えた。

これでひとまず、彼女のけじめはついたようであった。ただ、リカに休む暇がなく、しばらくすれば普及の名作の東京公演が開演する。リカが演じる男装の麗人は、日が経っていくことにつれて演技に磨きがかかっていき、進化を遂げようとしていた。

「...！」

その時、リカは会見会場内で、何か胸に突き刺さるような嫌な目線を感じていた。しかし、その正体は分からず、彼女はその場を後にした。

その日、雑誌の取材やテレビ収録、ファンクラブとの交流でリカの一日が終わろうとしていた。そして、彼女が帰宅するまで怪しい目はコソコソとついてきていた。

リカは気づいていない振りをして、怪しい目を泳がせて様子を窺った。相手は特に危害を加えるわけでもなく、ただついて来ているだけで、彼女が自宅のマンションに入ると、静かに何処かへ去って行った。

一安心したりカは、帰宅後、軽く入浴してから一眠りしようとした。

やがて朝を迎え、リカは規則正しく起床していた。まず、彼女はベランダに出て、太陽の光を浴びながら枕を軽くはたくのが日課であった。また、彼女はペットを飼っていないが小さなサボテンを育てており、名前まで付けていた。

「そらちゃん、お早う♪」

リカは、そう呼び掛けて如雨露でサボテンに優しく水を撒いた。この日は休みで何も焦ることはなく、ゆっくりと朝食の準備をした。リカはまずトーストを焼き、ハムエッグを作ろうとしていた。ベーコンの焼き加減は、カリカリになるまでの好みである。リカは朝食の皿をリビングのテーブルまで運び、ソファの上で胡坐をかいてテレビを観ながら朝食を取ろうとしていた。

「.....星座は最下位か～あんまり外出ない方がいいかな～...」

リカは朝の情報番組をザッピングしていき、あらゆる情報を得ていた。最近の流行については後輩から教えてもらったりするが、あまり関心がなかった。

ただブルーレイデッキの近くには、勉強のためにと数々の先輩たちが出演している歌劇団作品のDVDが並べられていた。その横にはこよなく愛する国民的アニメDVDボックスがあり、本人いわく、あの青くて丸いフォルムがたまらないそうだ、その他は、お笑い関係のDVDが綺

麗に並べられていた。

一見クールに見える彼女も可愛い一面があり、これがギャップと言える。

リカの休日の過ごし方は、大体決まっており、昼からは予約していたマッサージに行こうとしていた。彼女が休日にするのは、主に重労働で傷ついた体のメンテナンスであった。

また買い物にはあまり時間を取らず、服に関してはひらひらのスカートなど一着も持っておらず、ファンの夢を壊さないよう普段でも男役を演じ切り、履くのは主にジーンズであった。

プライベートでは十五年以上スカートを履いていないことになるわけで、舞台の仕事では女役を演じる時に履くことがあり、裏稼業では変装する時ぐらいであった。

「.....それでは次のニュースです...今朝、東京都〇〇市の派遣社員〇〇さん 二十七歳が住居しているマンションの一室で遺体となって発見されました...〇〇さんがストーカ行爲を受けていると友人に相談していることから警察はストーカ殺人として捜査を進めており、犯人の特定を急いでいます...ここ最近、ストーカ被害の件数は増える一方でストーカ規制法が改定され、取締りが強化されたことで、警察が把握する件数が増加した背景もあると思いますが未然に被害者を助けることは困難で.....」

「...物騒な世の中だね...」

リカは眉をしかめながら報道番組に呟き、コーヒーを啜っていた。

「！」

その時、他人事のように流れているニュースの感想を呟くりカであったが、何か引っ掛かっている様子であった。

「...そういえば昨日、誰かにずっと尾けられてたような.....」

リカは渋い顔をして、利き腕の人差し指を立てて、小説やテレビに登場する名探偵の決めポーズのように頬杖をついた。

「♪～」

その時、専用のスマートフォンに着信が入り、リカはすぐさま我に返った。彼女は、発信者の名前を見て溜め息をついた。

「...もしもし？」

リカは、不機嫌な声で電話に出た。

「.....おお、今日は休みだろ？.....急だけど駅前の.....喫茶店まで.....来てもらえるか.....」

電話相手が居る場所は、何やら騒がしくとぎれとぎれに声が聴こえるが、リカは聴き返すことをせず、素直に応答して電話相手が待つ場所に向かおうとした。

待ち合わせ場所は、JRのとある駅構内のパンケーキカフェであった。リカが汗を掻きながら店内に入ると、軽く彼女に手を振る男性が居た。彼は、裏稼業のパートナーの安藤であった。

「...何だ、走って来たのか？そんなに俺に会いたかったのか...？」

「はあ...早くあんたとの用事を済ませたいだけよ...」

「...まあ座れよ...何か頼むか？パンケーキ美味しいぞ！」

「.....遠慮しとくわ、朝食食べてきたから...アイスコーヒーもらおうわ...」

リカは、運ばれた水を飲み干し、ぶっきらぼうな口の利き方で安藤に接した。

「それで何の用？」

「...そうカリカリするな、ただ、これを渡しに来ただけだ...」

すると、安藤はリカにA4サイズの分厚い封筒を差し出した。

「...これは？」

「.....ここ数ヶ月に起こった重大事件の資料だ...ほぼ解決に至っていない...今の公演が終わればこっちの方にも戻ってもらう約束だ...目を通しておいてくれ...」

「...こんなのメールか郵便で済むでしょう？」

「お前は馬鹿か？これはそこら辺に落ちてるネタじゃなく極秘情報だ...うちは特に情報漏えいに煩いからな...直接渡すのが一番安全だ...」

「...これだけのためにこっちに？」

「.....まあね、やっと休みが取れてね...夜は仲間と飲み明かすつもりだ...それまで暇なんでついでだ...」

「...だいぶ忙しそうね...酷い顔だわ...」

「...お互い様だろ...稽古中のお前は鬼気迫るものを感じたぞ.....公演の方、観させてもらった...正直予想以上だった.....お舞台に立つお前を見て震えたよ...表の世界でも命懸けのようだな...」

二人は、軽く笑みを浮かべ話し合った。

「...まあね、中途半端は嫌いだから...」

「...退団会見も観た...記者に答えたことは本心か？」

「...ええ、何か気になることでも？」

「...いいや、ただ昔と比べて随分素直になったと感じただけだ...心残りはないだろう...？」

「...勿論、私はプロよ...」

リカは、迷いのない鋭い目つきで安藤の質問に応じた。

「.....真面目な話はこれくらいにして.....ここはいい街だな...お前と仕事するためだけに通っていたが...実に気に入った...」

「...随分とはまったようね...」

「...ああ、仕事場とは全く空気が違うからな...お前が所属する劇団は今年、記念すべき年で随分潤っているみたいじゃないか...関連株が上昇しているぞ...」

「...そういうのって興味ないわ...」

「...ああ俺もだ、ギャンブルはたまにするが...そういえば近くに競馬場があったな...お前にとって、この辺は庭みたいなものだろう？案内してくれよ...」

「...生憎だけど、午後は予定が入っていてね...ガイドは出来ないわ...」

「...そうか、そりゃ残念だ...」

そうこうしているうちに安藤はパンケーキを食べ終え、二人はそろそろ店を出ようとしていた。

「...お前、金持ってるか？」

「え？持ってるけど.....」

「...悪いが割り勘にしてくれ、以前はちょっとしたものでも経費で自由に払えて楽だったんだが...最近厳しくなってきたね...今回はプライベートだしな...交通費も自腹...」

「そんなこと言って.....たくさん稼いでるでしょ？」

「...いや大したことない...危険な仕事といっても公務員...たかが知れてる...お前の方が稼いでいるだろ？」

「...さあどうだか...今の生活に不満はないからね...物欲もないし...」

「...そのようだな...こっそり副業でも始めたいところだ...休みがもっとあれば...」

「私に嘆かれても困るわ...」

「...そりゃそうだ...もう解散するか.....おっと言い忘れたことがあった...」

「？」

リカと別の方向へと進む安藤は、ふと何かを思い出して彼女の方へ引き返してきた。

「.....これは俺たちの管轄じゃないが、近頃、悪質極まりないストーカー事件が増えてきている.....ニュースは観ているか？」

「...ええ、今朝のニュースで関連したものが.....」

「.....一般女性だけでなく、芸能界の方にも魔の手が広がっているみたいで、都内でのこと

だ...うちのアイドルグループの一人が狙われていると某芸能事務所から被害届が提出され、犯人を突き止めるため捜査に乗り出した、担当捜査員が被害を受けているアイドルに扮し、囮捜査を執行したんだが.....」

「？」

安藤は滑らかな口調で喋り続けたが、一旦一呼吸した。

「...ストーカーとみられる人物は、マスコミ関係者だった.....どんな世界にもルールがある...マスコミ関係者の男は、まだ新米でそのアイドルのファンでもあったわけで、彼は仕事の一線を超え、ストーカーまがいの犯行を.....」

「...その彼は逮捕したの？」

「...勿論、所持品を調べるとストーキングしたアイドルのプライベートの写真と動画が保存された携帯端末やデジカメが発見され、家宅捜索で部屋を見ると、壁一面にストーキングしたアイドルの大判写真...アイドルが出演している番組や作品のDVDやグッズが山積み...自ら加工した卑猥な写真もパソコンに保存されていた...証拠は充分揃っている...」

「.....何故、その話を私に？」

「...お前も巻き込まれる可能性があるからだ...お前の秘密が暴かれたらこちらもただでは済まない...近頃のマスコミは特にたちが悪いからな.....分かるな？念を押しておくぞ...」

「...分かってるわよ、私はドジを踏まない」

リカは、鋭い目つきで安藤に答えた。

「...よし、信じよう...急に呼んで悪かった...もう自分の時間を過ごしてくれ...また会おう...」

安藤は、リカに手を振ってその場から去って行った。リカは、頭を抱えて一旦家に戻った。

リカは、午後から予約していたマッサージで疲れて固まった体を解してもらっていた。続いて彼女は常連となった整骨院、歯医者に顔を出して徹底的に体のメンテナンスを行っていた。

気づけば夕刻となり、買い物を済ませたリカは、公園のベンチで休憩して沈もうとする太陽の光を浴びていた。久々にリフレッシュした彼女からは、険しい表情が消えて貴重な休日を満喫した様子であった。

「.....パシャ」

そのシャッター音は、リカから数十メートル離れた物陰からであった。サングラスにマスク、その怪しげな人物は、息を殺してリカの無防備な姿の写真を数枚撮り、煙のように消えた。リカは怪しげな人物に気づいていなかった。

貴重な休日が過ぎ、リカにはまた過酷な試練が待ち受けていた。彼女率いる劇団員は、東京に遠征して磨き上げられた姿を披露しなければならない。

金髪の長髪をなびかせる麗人をイメージしているのか、リカの髪は肩にかかるくらい伸びており、華麗になびかせていた。

主演の重みを背負うリカが積極的に動けば、仲間である劇団員は皆、何一つ嫌な顔をせず彼女について行った。

徹夜の稽古が何日も続き、リカたちは納得するまで奮闘していた。

稽古期間はあっという間に過ぎていき、ついに東京公演の日となり、待ちに待った公演初日、リカたちは万全の態勢で臨んだ。その日、何の問題もなく、演目はスムーズに進んで行き、稽古と大劇場公演での成果を見せて、大いに観客を感動させた。称賛を浴びたりリカたちは達成感を得て、舞台挨拶で観客に向けて深々とお辞儀をした。これにて東京公演もいいスタートを切ったのであった。

一仕事終えたりカであったが、彼女にはまだ大事な仕事が残っていた。それはファンクラブ恒例の交流イベントであった。ファンから温かい応援の言葉を掛けられ、リカはいつも通りに振る舞った。

夜は更けていき、やっと自由の身になったリカは、都内で借りている賃貸マンションまで付き人に車で送ってもらっていた。遠征する場合、劇団員たちはホテル住いをするのだが、リカのように裏稼業をしている劇団員は、マンションを借りていた。

車中でリカは、付き人と今後のファンクラブとの予定のことを話したり、雑談などして、穏やかな時間を過ごしていた。

しかし、それを妨害しようとする影が迫ってきていた。バックミラーに映る後続車がどうも怪しかった。車間距離が徐々に縮まっていき、異変を感じた付き人の女性は、スピードを上げて引き離そうとした。それでもその後続車は、リカたちが乗っている車両について行こうとしていた。

「...何？あの車...！」

不審に思ったりカは、後続車の動きを気にしていた。明らかに後続車のレンジローバーは、リカたちの車を煽っていた。

しつこく付き纏うローバーの悪質な行為は、エスカレートしていきローバーは付き人が乗っている運転席側へと移動し、横からきつく車体をぶつけた。

「...きゃー！」

運転手の付き人はパニックを起こし、まともに運転することが出来ずにいた。

「.....まずい...！！」

窮地に追い込まれたリカは、咄嗟に付き人のサポートをしようと彼女の手を覆うようにしてハンドルを握った。

「...り...リカさん！」

「.....怖いだろうけど落ち着いて...ハンドルはこっちに任せて...あなたはアクセルの方を...思いっきり踏んで...！」

「分かりました...！」

リカと付き人は、協力してどうにかピンチを切り抜けようとしていた。ローバーは攻撃を緩めず、獲物を狙う獣のように襲い続けた。激走する二台の車は既に制限速度を超えており、もう決着が着こうとしていた。リカたちが乗る車は酷く傷つけられていき、逃げ場を失っていた。ローバーは止めを刺そうと、後方に移動してリカたちが乗る車を思いっきり押し出した。

「...！！」

気づけば前方の信号は、赤の状態で交差点に一トントラックが迫ってきていた。

「...え...？わ...わ...！」

トラックの運転手は暴走する二台の車に驚き、急ブレーキを掛けるが間に合いそうになかった。

「...ドガガ！！！！！！」

その出来事は一瞬のことであった。リカたちの車とトラックが衝突して怪獣の咆哮のような恐ろしい音が鳴り響いた。そして、リカの目の前は暗闇に閉ざされた。

「.....カさん.....リカ...さん.....」

「...！」

しばらくすると、リカは優しい女性の声で何度も名前を呼ばれ、ゆっくりと目を開けた。目の前には付き人の女性の姿があった。

「...お休みのところすみません...家の前に着きました、ちゃんと布団の上で休んで下さい...！」

「.....え...ああ、ありがとう...」

リカは、まだ意識が朦朧としており、状況を把握しきれなかった。どうやら彼女は会話をしている途中で眠ってしまったようであった。夢だと気づいたリカは、安堵の表情を浮かべた。

「...大丈夫ですか？」

「ええ...どうやら疲れているようね...」

「...ゆっくり休んでください、無理をすると体に毒です！」

「...その通りね、余計なことを考えず横になるわ...お休みなさい...」

無事に送り届けてもらったリカは、軽い足取りで自宅があるマンションの出入り口に向かおうとした。

「...？」

その時、リカは嫌な視線を感じた。しかし正体は分からず、彼女は首を傾げてオートロックの鍵を開けた。

悪夢を見たリカは、どうも後味の悪さを感じていた。物陰に隠れる怪しい人物は、リカがマンションに入ったのを確認してから闇に埋もれた。

リカの周りで何か蠢いているようであったが、これはまだ始まりにすぎず、思いがけないことが展開しようとしていた。

その日、歌劇団にとって特別な日となった。それは疲労が溜まっているリカたちにとって、喜ばしいニュースであった。

六月下旬某日、歌劇団で初演されてから四十年経つ作品が、動員二百五十万人という新たな金字塔を打ち立てた。創立五十周年を迎えた、同劇団の演目の中では断トツの動員数。東京の劇場では公演後に記念セレモニーが行われ、主人公の麗人を演じたりカは「長年にわたる温かい声援のおかげです」と支え続けてくれるファンに感謝した。それから記念すべき二百五十万人目の観客となった女性に花束を手渡し、舞台挨拶も終わりに差し掛かろうとしていたが、セレモニーはまだ終わる空気ではなかった。セレモニーにお祝いで駆けつけたサプライズゲストが居るようで、劇団班長が名前を呼び上げた。リカは、その名を耳にした時、すぐ鳥肌が立った。その人物は、黄色い歓声に包まれて颯爽と現れた。ステージ上には、過去に今回のヒロインである麗人を演じた経験がある元歌劇団トップスターのカナメが登場。誰よりも喜んだのはリカであった。リカはカナメに抱擁された途端、嬉しさのあまり声がひっくり返って体が震えていた。

それもそのはずで、リカが歌劇団専属の音楽学校を受験していた当時、カナメの演じる姿に憧れていたと言っており、尊敬する大先輩の登場に満面の笑みを浮かべた。彼女自身、来年二月に退団が決まっているだけに、大きな節目を迎えて感極まった。

そして、「いつか私の演じた姿を見て歌劇団に入ったという子が現れてくれれば」と、純粹に歌劇団の未来について熱く語った。この日はリカにとって決して忘れられない日となった。

そんな中、またそこに怪しい影が忍びよっており、正体や目的は不明のままであった。しかし、事態の進展は激しさを増し、リカは密かに攻める体勢を取ろうとしていた。

東京 有楽町

その日、東京の劇場は休演日で、リカは劇場近くのレストランで昼食を取っていた。リカは午前中、雑誌の取材を受けていて、そこから人気のあるバイキングレストランに立ち寄ったのであった。

「...んま！」

リカは、そう呟いて美味しそうに頬張っていた。

「...美味しそうなお肉ですね～」

「...！」

その時、リカは驚きのあまり、喉が詰まりそうになっていた。

突如、彼女の目の前に現れたのは歌劇団トップスターのミュ。現代的な容姿を持ち、何事にも真っ直ぐに向き合う魅力的な舞台人である。裏世界で都内を中心に密偵活動を行っている。リカの一年後輩。

「.....あら珍しい...何でまた...仕事？」

「.....ええまあ、本業ではないですが...」

「.....！何か事件？」

「...はい、落ち着いたんで休憩を...そこ座っていいですか？」

「ええ、どうぞ、何か食べる？」

「はい...もう腹ペコで.....適当に取ってきます...」

ここで急遽、歌劇団トップ同士の食事会が始まろうとしていた。

「...先日の特別公演ではお世話になりました...いい経験になりました！」

「...こちらこそ楽しかったよ、最近仕事でよく一緒になるね~」

「...そうですね、祭典も貴重な体験でした...リカさんも先日いいことあったでしょ？」

ミュは、嬉しそうな顔でリカに訊ねた。

「...ああ、例のセレモニーね...あれは驚いたわ、何も聞かされてなかったから...カナメさんは尊敬する大先輩の一人だから...祭典では絡むことなかったらラッキーだったわ...」

「...本当に尊敬出来ますよね~私今度、再演ものでカナメさんが演じた妖精を演じることになったんでめっちゃ嬉しいです！対談も予定されているし...！」

「...いいな~私もやりたかったな~演出家の先生にお願いしたんだけどな~」

リカは箸を止めて、子供のようにいじけていた。

「...リカさん、大きいから妖精とか似合わないのでは...」

「好きでデカくなったんじゃないやい！」

ミユは、先輩であるリカをからかって楽しんでいた。

二人はしばらく歌劇団談話で熱くなり、食後のコーヒーを啜りながら話題を変えて、裏稼業のことについて話そうとしていた。

「...で何を追っているの？」

「.....今朝、新宿に方に行って来たんですが...ある人物が訪れました...その人物は闇社会を牛耳るドン...香港を拠点にしている中華マフィアのボスです...」

「...そいつの目的は？」

「...新宿のヤクザと落ち合う約束をしていたようです...ホテルのカフェで何やら談話していて、とりあえず騒ぎは起こらずほっとしました...」

ミユは、話しながらリカに現場の写真を見せた。

「...この男、見たことある...表では大手ベンチャー企業の取締役の顔を持ち、裏では暴力組織のボス...よからぬ連中ね...」

「...中華マフィアは、まだこの辺に潜伏しているんで油断出来ません...そこで緊急特別チームが派遣されました...主力となる人材として、マユさんが...」

「.....マユさんが...！」

「...ええ、退団後も変わらず裏稼業を続けていますよ」

「...そうなんだ、さすがだね～」

「...ええ、マユ姐さんはしばらくの間、管轄は主に東京になります、今回の件は、彼女が指揮することに決まりました...」

「...そっちはそっちで大変そうね...」

「...関西の方も色々問題あるみたいですね...」

「...今の公演が終われば、裏稼業再開だからね...覚悟して掛からないと...」

「...本業の方も忙しいですよ...裏の仕事が片付いたら競馬場で仕事です...」

「何でまた？」

「...競馬場で国歌を独唱するんですよ」

「...そりゃすごいね～」

「...その後、九州に遠征...体がいくつあっても足りませんよ...」

「...まったくね、体がよく持ってるなと思う...どれだけ体重減ったか...」

「後半も慌ただしくなりそうです.....退団会見観ましたよ...先のプランは言った通りですか？」

「.....ええ、包み隠さず喋ったつもりだけど...」

「...どっちの仕事も続けるでしょう？」

「.....裏の仕事は辞めたいけど、相手を見つけないとどうしようもないわ...」

「...本当に居ないんですか？」

ミュは、リカの顔をじっと見て、交際相手が居ないか突き止めようとした。

「...馬鹿ね、私は器用じゃないんでね...仕事で手一杯よ...」

リカは、呆れ顔でミュの顔をおさえながら答えた。

「...退団後、すぐに仕事したいですか？」

「.....いえ、特に何も決まってないし、しばらく地元に戻ってのんびりするわ...」

「...成程、リカさんらしいですね.....話のネタも尽きませんが、そろそろ戻らないと...ご一緒にきて楽しかったです...」

「...私もよ、また時間が合えば食事しましょう...今度はディナーでも...」

「...いいですね...行きつけの店を紹介しますよ.....！」

「...どうしたの？」

その時、ミユはぱかっと口を開き、物言いたげな様子であった。

「.....ディナーで思い出しました...夜中に女性が襲われる被害が多発しています...知ってます？」

「...ええ、ストーカー被害のニュースはよく耳にするわ...社会問題になってるわね」

「...被害は拡大していく一方で、残忍極まりない犯行で死亡者も出ています...」

「.....私らを標的にすれば一網打尽に出来るんだけどね...」

「私たちなら大丈夫ですが...下級生には注意を呼び掛けています...ファンクラブの人たちにも...」

「...私も仲間たちに知らせるわ...夜道は注意しないとね...」

「ええ、それじゃあ私たちの周りで何も起こらないことを祈りましょう...」

ミユは、リカに礼儀よくお辞儀をして先に勘定を済ませた。リカの方は特に予定がないため、のんびりと店内でくつろぎ、デザートコーナーへと足を運んだ。リカが貴重な休日を過ごす中、またそこに怪しい影が監視していた。しばらくして、リカが店を出ると、怪しい影は彼女を尾行しようとした。

「...ポン」

「...！」

その時、謎の尾行者は背後から何者かに肩を軽く叩かれた。

「...悪いがちょっと付き合ってもらおうよ」

謎の尾行者に声を掛けたのは、リカと同僚の安藤であった。そして、謎の尾行者の正体は二十代後半の清楚な女性であった。安藤は、警察手帳を見せてその女性を呼び止めてリカから遠ざけた。謎の女性は抵抗せず、安藤に従った。

第八話 DOMINO 後篇

安藤は、リカを尾行していた謎の女性を連れて、劇場の近くにあるモダンな雰囲気が漂う喫茶店に入店した。

「...奥は空いてるよね？」

「...ああ、好きに使ってくれ」

安藤は、店主の男性に声を掛けて奥の個室へと向かった。どうやら彼の行きつけの店のようであった。

「...そこに掛けてくれ」

「.....はい」

安藤は謎の女性を座らせて、ウェイトレスに注文を伝えようとした。

「...俺はホットケーキセットで.....あなたは何にする...？」

「...え?.....じゃあアイスコーヒーで...」

注文を済ませた二人は、重い空気に包まれた。謎の女性は、俯いて険しい表情であった。そんな彼女に安藤は容赦せず話し掛けようとした。

「.....あなたには訊きたいことがある...嘘偽りなく答えてもらうよ...」

「...一つ質問していいですか？」

「...いいよ、何だい？」

「.....あなた、警察の方ですよ？こんな所で事情聴取を？」

「...確かに俺は警察の人間だが、物事には順序がある...まだあなたを連行する気はない...話をしたいだけだ...あなたこそ何故、抵抗せず黙ってついてきた？」

「...それは.....」

「あなたは何か隠しているように思える...署よりここの方が落ち着く...重い口も開きやすいだろう...なんなら担当刑事を呼ぼうか？ ストーカー事件担当の...」

「私はストーカーなんかじゃない！」

その時、ぼそぼそと話していた謎の女性は急に声を張り上げた。

「...何だ、声出るじゃないか...もう少しボリューム下げてもいいかも...」

安藤の謎の女性への挑発は、意図的なものであった。

「.....事情を話せば解放してくれる？」

「...話の内容によるな...場合によっては拘束されるかもしれない...俺は嘘を見抜ける...！」

「.....分かったわ、そっちの質問に正直に答えるわ...」

「...よし、まず軽く自己紹介してもらおうか...心配するな、記録するつもりはないし、情報を流すつもりもない...」

謎の女性は、安藤のことを信じて口を開いた。

「.....私の名は雨宮シズク...二十六歳...〇〇出版社の芸能部で記者として働いてるわ...」

「...成程、特殊な仕事だな...あなたが担当している記事は何に載っている？」

「...私はまだ新米で未熟だから、ちゃんと載ったことがない...スポーツ新聞にたまに小さく載る程度よ...低レベルの記事ばかり...」

「...そうするとさっきの尾行は仕事のためか...？」

「...ええ、そうよ、だからストーカーでもないし、危害を加えるつもりはないわ...」

雨宮は真っ直ぐな目で答え、安藤は疑おうとしなかった。

「...仕事のためとはいえ、あなたが追っている相手が誰だか分かってるのか？」

その時、安藤は険しい顔を浮かばせて、雨宮を問い詰めた。

「...ええ、彼女、大手歌劇団のスターでしょ？」

「.....彼女を選んだ目的は？」

「.....いいネタになると思ったからよ...今年は五十周年とかで話題性があるから...それに彼女...凄いスクープ持ってそう...これだけだと言葉が足りないかしら？」

「...あの劇団には、専門の記者やスタッフがついている...暗黙のルールで一般の記者が取材するには許可が要るんだが...」

「...随分と詳しいのね...」

「.....これは秘密にされていることだが特別に教えてやろう.....」

「...！」

「.....すみません、お待たせしました～ホットケーキセットです～」

「おっ待ってました～♪」

「.....」

安藤は、注文していた品が運ばれてくると子供のように喜んでいて、二人はひとまず一服して重い空気をかき消した。満面の笑みで好物のホットケーキを食べている安藤の姿を見て、雨宮は呆れ顔であった。

「.....さてそろそろ本題に移るか...おたくは何も知らずにとんでもない所に足を突っ込んでいる...」

「...何ですって？」

安藤はセットのカフェオレを飲み干し、重要なことを話そうとした。

「...今から話すことは機密情報だ...心して聴いてほしい...」

雨宮は安藤の発言に対し、静かに頷いた。

「...例の歌劇団と警察組織は古くから太いパイプでつながっていてね...長年、お互いで助け合いながら君臨し続けている...」

「...そんな...！」

雨宮は、驚きのあまり口を開きながら安藤の話を聴き続けた。

「...例の歌劇団の創始者は財界の大物.....日本社会に革命を起こした人材ともいえる...彼は各方面で顔が利き、警察上層部や軍事関係者の人間とも仲が良かった...そしてある協定を結んだ...国家を陰から守る組織を設立すると...それが秘密警察、俺はそこに所属している.....そして彼女も.....」

「...まさか...！！」

「...ああ、あなたが追っているあの女性も秘密警察の一員だ...」

「何故、劇団員が警察に...？」

「きっかけが生まれたのは、終戦から二十年後、ある警察上層部の人間が歌劇団の公演を観劇して深く感銘を受けた...類まれな美しさや身体能力に惚れ込んでいたようだ...それで彼はある決意をして、歌劇団創始者のもとを訪れた...彼は一言、うちに欲しいと告げた...」

「...それで創始者の方は？」

「.....一日待ってくれと答えて、改めて呼び出して快く受け入れた...そして、当時の軍事関係者も協力して規制を作り、ついに実現した...隠密、密偵活動、時には暗殺を専門にする最強の女性劇団員の誕生だ...！」

「.....！」

雨宮は、とんでもない情報を耳にして唾然としていた。彼女は気持ちを落ち着かせるため、水を一気飲みした。

「...劇団員が秘密警察だと知っているのは限られた人間のみ.....家族さえ知らない...俺は彼女と十年パートナーを組んでいる...」

「.....それでパートナーのことが気になって私を呼び止めてたわけね...」

「……いや…俺が気づいて動いたわけじゃない…数日前、彼女から連絡があつてね…誰かに尾けられている…何者か突き止めてほしい…とね」

「…彼女が！…気づいていない振りをしていたのね…」

「……ああ、彼女は最初、自分の命を狙う危険人物だと思っていたそうだが、危険性がないことに気づき、わざと泳がせていた、今は公演で忙しく、派手に動けないから俺に頼んだわけだ…」

「…成程、さすがね…やられたわ…」

「……あなたにはまだ訊きたいことがある…所持品を調べたい…」

雨宮は拒否せず、素直に自分の鞆を安藤に渡した。安藤は、まず彼女の鞆から所持品のカメラを取り出し、保存されている写真を確認した。

「……やはり記者が撮る写真は違うな…こういったのが週刊誌で晒されるわけだ」

「…腕はまだ未熟よ…ボツ写真が多い…」

保存された写真の多くは、リカのプライベートが写し出されたものであった。

「ん？」

「どうしたの？」

その時、安藤はあることに気づいた。

「…この写真だけなんか変だぞ…ほとんど真っ暗だ…」

「……ああ、それは確か、人とぶつかって誤作動で撮れた写真よ…最近、整理してないから消すのを忘れてたわ…」

「…成程…それで、あなたが集めたネタはいつ記事になる？」

「…まだ未定よ…雑用に追われてなかなか手がつけられないのよ…それに編集長にもまだ話していないし……」

「.....何だ、仕事仲間と協力して動いているんじゃないのか？」

「...自分でやってることよ...ちゃんとまとめてから上司に伝えてみようと思って...興味本位でやったことよ」

安藤は、雨宮の言葉に安心した様子であった。

「...それなら手っ取り早い...てっきり組織ぐるみでやっているのかと...これならあなただけに忠告すればいい...彼女のことは記事にしないことだ...知人や友人に劇団の秘密ネタとか話してないだろうな？」

「...そんなこと話してないわ！これといったネタは掴んでいないし...」

「...あ...そう...念のために聴くけど、ブログやLINEで自分が掴んだネタとか公開してないだろうね？」

「ええ、SNSはよく利用するけど...プライベート用よ、仕事用で開設していないわ...」

「.....そうか」

安藤は、思ったより事態が深刻ではなかったので拍子抜けしていた。

「...ねえ刑事さん、私は罪に問われるの？」

「...え？ああ、それは心配ない、俺の思い違いだったようだ...身の潔白が証明できたから署に来る必要はない...事件が起きないと動けないのが警察の性分だね...」

雨宮は安藤の言葉を聴いて、安堵の表情を浮かべた。

「.....もし、私が歌劇団の秘密を暴いて記事にしていたら、どうなっていたの？」

「...！」

その時、雨宮の質問で安藤の表情が一変した。

「.....急に恐ろしいことを口にするな...いいだろう、時間は大丈夫なのか？」

「...ええ、うちの職場、自由だから...」

安藤は、乾いた喉を水で潤してから重い口を開いた。

「これは先輩刑事から聞いた話だ...まだネットや携帯が普及してないかなり前になる...ある新聞記者が何処で情報を掴んだのか、歌劇団と警察機関の関係を暴露しようとしていた...しかし、それは事前に何者かによって阻止されて、世間に公表されなかった...そして、新聞記者は蒸発した...友人や同僚、知人、家族...誰も彼の行方を知る者は居なかった...それは、まるで神隠しにあったかのように姿を消した...さらには何事もなかったかのように問題視されなくなった...」

「.....そんな、まさか.....！」

勘が鋭い雨宮は、あまりの恐怖にその先を喋ろうとしなかった。

「...ああ、お察しのとおり隠蔽された...うちの組織に.....これで分かっただろう...劇団員が秘密警察の一員だとばれるとどんなことが起こるか...」

「.....」

雨宮は顔色が悪くなり、静かに頷いた。

「.....劇団員の黒歴史が公開されれば、イメージダウンで歌劇団の存亡が危ぶまれる恐れが...勿論、警察の方も...マスコミの恰好の餌食となり、敵地に潜入している捜査員は返り討ちにされるだろう...今まで苦勞して積み上げてきたドミノは全て崩れ落ちる結果に...上層部はそれを恐れている、だから隠蔽工作を...決して開けてはいけないパンドラの箱...あなたも危ないところだった...」

「...そのようね」

雨宮は、素直に納得している様子であった。

「.....というわけだ、今日、俺が話したことを忘れて手を引け...また別のネタを探すのが賢明だ.....この保存された写真はこちらで預かっておこう...時間を取らせて悪かったね...これでお開きだ、お疲れ様でした.....雨宮さん？」

雨宮は安藤の声に反応せず、俯いたままであった。

「...忠告はしたからな.....何か気になることがあれば、ここに...」

安藤は、テーブルに連絡先が書かれた紙を置き、彼女をそのままそっとして、注文票を抜き取って先に店を出た。

雨宮は、頭を抱えてしばらく放心状態で座っていた。彼女は、これを機にもう好奇心で危ない橋を渡らないと肝に銘じた。

しかし、この件はまだ解決していなかった。悪夢はこれから起ころうとしていた。

その夜、リカは、マンションの一部屋でパソコン画面に集中していた。画面には安藤が映っており、パソコン電話機能を利用して何やら話していた。内容は、リカを尾行していた雨宮のことについてだった。リカの家にあるパソコンは、主に裏稼業用に使っている。

「...彼女はシロだったってことね...」

「...ああ、当初、クロに近いシロ...グレーだと思ったが、見間違いだったようだ...」

「とりあえずほっとしたわ...彼女には嫌な思いをさせたわね...」

「ああ、これで一応解決だ...だが、彼女の撮った写真を確認すると驚くことがある...うちのボスと歌劇団の上層部が、和食料理店前で会話しているところが撮られてる...お前も一緒に写ってるぞ...」

「.....退団のことを話すために一緒に食事した時の写真ね...」

「...お前のプライベート写真も満載だ...これ全てが外に流出されたら、えらい騒ぎだ...預かって正解だった...責任もって処分しよう...彼女がまだ新人でよかった...変に知識や経験がある人間ならもう公の場で暴露されてる...」

「...今回は危機を免れたようね...お互いに...」

「...ああ、例の新聞記者のようにならないように見張ることも、俺たちの仕事だ...これで頭のもやもやは無くなっただろ?」

「...ええ、今夜はよく眠れそう...最近、変な夢をよく見るの...明日から公演が続くんでね...よく眠っておかないと...」

「...力になれてよかった...こっちはまだ残業だ...俺もあまり眠ってない...休暇もだいぶ先だ...」

「...確かに酷い顔ね...まあ倒れない程度に頑張りましょう...」

「ああ.....！」

「...どうしたの？」

「...着信が入った.....誰からだ？」

安藤は登録されていない番号で少し躊躇したが、とりあえず電話に出ようとした。

「...もしもし？」

「.....け.....刑事さん...？」

「?...もしもし？」

電波状況が悪く、声も小さいためうまく聴きとれず、安藤は聴き直した。リカは電話の接続を切ろうとしていたが、安藤の様子が気になり、そのままにしていた。

「.....刑事さん.....助けて.....こ...こ...殺される...私、殺される...！」

「.....その声は.....雨宮さんか...？どうした？落ち着け！」

安藤に電話を掛けてきたのは雨宮で、彼女は何故か公園の遊具の陰で体を小さくして電話を掛けていた。

「.....もう意味が...分からない...急に変な男が襲って...きて...！」

「.....何だって？誰かに襲われてるのか.....今、何処だ？」

「.....きゃー！！！！」

その時、雨宮は張り裂けそうな声で悲鳴を上げた。彼女は謎の襲撃犯に見つかって必死に抵抗して逃げようとした。

「...おい？大丈夫か...！！」

安藤は雨宮を心配するが、電話は切れてしまい、虚しくも声が届かなかった。

「.....何か深刻そうね...」

リカは安藤の落ち着きのない顔を見て、精神状態が尋常ではないと察した。

「...例の女性記者が、何者かに襲われた.....」

「...え？」

突如起きた惨劇により、リカたちは、上手く自分の体に信号を送ることが出来なかった。しかし、しばらくしてから進展があった。雨宮は無事に発見され、警察病院に搬送されたと連絡が入ったのである。安藤はすぐさま彼女が入院している病院に向かった。

彼女が居る病室を覗き込むと、専門医と看護師が、雨宮の怪我の容態を診ていた。

「...何ですか？あなたは？」

「...すみません、警察の者です...彼女に訊きたいことが.....話せますか？」

安藤は、神妙な面持ちで専門医に訊ねた。

「.....そうだな、治療は済んだし、意識もしっかりしているから大丈夫だろう...ただし、あまり長くならないように...彼女は休ませる必要がある...」

「分かりました...ありがとうございます、あと、二人だけにしてもらえますか...？」

「...いいだろう」

安藤は専門医の許可を得て、横になっている雨宮に接近した。

「.....気分はどうだい？」

「.....最悪.....」

雨宮は安藤と視線を合わさず、不機嫌そうな声で答えた。

「.....今日は散々だったな...俺に事情聴取され、帰宅途中に襲われたり...」

「全くよ、今日は厄日だわ...」

「...しかし、現場近くに交番があってよかったな...警官が駆けつけてなければ、あなたは恐らく.....ほんと悪運が強いな」

「...そんな言葉で気分は変わらないわよ...どうして私がこんな目に...?」

「.....発端はこれだろ...」

すると、安藤は自分のデジタルカメラを取り出し、保存されている写真を雨宮に見せた。

「...これは？」

写真を確認すると、真っ暗でよく分からないものであった。

「...覚えていないか？あなたが間違っって撮った写真だ...」

「このボツ写真が何なの？」

「.....いいや、これはボツ写真じゃない、証拠だ...」

「...証拠？」

雨宮は、安藤の発言を把握出来なかった。

「...確かにこれは仕事に使える写真だが、よく見たら、うっすらと人影が写ってる...」

「.....あっ！確かに.....」

「.....あなたを襲った人物の特徴は？」

「...え？特徴...？そうね、真夜中で暗かったし、パーカーのフードを被ってたからよく分からなかった...長身で痩せ型の男性としか.....」

「.....今頃、あなたを襲った犯人は刑事に囲まれて取り調べされているだろう...彼が襲撃事件を起こしたのは今回が初めてじゃない...前科がある...あなたは一度、彼と顔を合わしている...！」

「...え？知らないわよ？」

「...いいや、会っている...よく思い出してほしい...このボツ写真にうっすら写ってるのはあなたを襲った男だ...！」

「.....！」

雨宮は、思わぬ事態に驚愕して体が震えていた。

「.....ここ数ヶ月、仕事から帰宅する女性を狙った襲撃、強姦事件が多発していてね...残忍な犯行が続き、ついに死亡者が出た...」

「.....じゃあ彼が...！」

「...ああ、江乃森 康弘 三十二歳 無職、彼は逃走中に偶然、あなたと接触したわけだ...」

「.....そういえば思い出したわ...襲われる前、何かブツブツ言っていた...ちゃんと聞き取れなかったけど...何処だ、何処にある...とか...」

「...やっぱりな、彼は写真を探していたんだ...それであなたと接触して襲った...」

「...そんな...こんなぼやけた写真のために...？」

「...あなたにとってはどうでもいい写真でも、彼にとっては重要な物だったんだよ...はつきり写っていると勝手に思い込んだんだろう...それで一旦逃げるのを止めて、写真もろともあなたの存在を消そうとしたわけだ...執念深い男だ...」

「.....そういえばまた思い出したけど...確かここ数日、何度も職場に妙な悪戯電話が掛かっていたけど.....それも...？」

「ちっ...やっぱり心当たりあるんじゃないか！尾けられていた恐れもある...何故、警察に相談しなかった？」

「.....特に気にならなかったから...まさかこんな大ごとになるとは思ってなかったのよ...」

「...全く...命があって何よりだ...」

「本当にそうね.....偶然が重なってとんでもないことが起きていたのね...」

「...ああ、世の中、何が起こるか分からない...今回のことで色々と学んだだろう？」

「...まあね」

「.....さて、真相を伝えたことだし、そろそろ失礼するんだが...その前にあなたに渡す物がある...」

すると、安藤はデジタルカメラからSDカードを抜いて、雨宮が寝ているベッドの横にある小机に置いた。

「...これは！」

「...あなたの物だ...中にはさつき見せたボツ写真しか入っていない...それ以外は全て削除した...必要のないものだからね」

「...仕方ないわね」

雨宮は、素直に納得している様子であった。

「...どうやら俺が先着のようだな...じきに担当刑事が事情聴取のために面会に来るだろう...その時にこのSDカードを渡せばいい...」

「...これって聴取じゃないの？」

「...いいや、ただのお見舞いだ...花を持ってくるべきだったかな...管轄が違うんでね...こっこの件は一切関与してない...二度手間かと思うが、刑事たちが来たら俺に話したように話せ...」

「...あなた、結構世話焼きでしょう？」

「...ああ、綺麗な女性限定だ.....ああそうだ、まだ渡す物があった...」

安藤はそう言って、ポケットから一台のスマートフォンを取り出した。

「...それは...！」

安藤が手にしているスマートフォンは、雨宮の物であった。

「あなたを助けた警官がみつけて保管していたよ...襲われている時にうっかり落としたんだろう

」

「...ありがとう」

「...礼を言わなければいけないのはこっちの方だ...形はどうあれ、あなたのお蔭で一人の犯罪者を逮捕することが出来た...何かお返ししないとな...」

「...いいわよ、そんなの...」

「...よく電話してくれたね...助けに来ると信じていたから掛けたんだろう？...想いが伝わったから助かったんだと思うが...」

雨宮は照れて顔が赤くなり、掛布団でその顔を隠した。

「...用が済んだならもう帰って...私は怪我人よ...もう眠りたいの...」

「...ああ、そうだな、失礼するよ...もう会うことはないと思うが...じゃあお大事に...」

安藤は、そっぽを向く雨宮に別れの挨拶をして、静かに病室を後にした。安藤が居なくなったのを確認した雨宮は、複雑な表情を浮かべていた。

そして、悪夢の夜から数週間が経とうとしていた。雨宮の怪我は順調に回復しており、そんな彼女は暇そうな顔して欠伸をしていた。

ある真夜中、お見舞いに訪れる者はもう居ないだろうと思った雨宮であったが、耳を澄ますとコツコツと足音が聴こえ、その足音は確実に彼女の病室に近づいていた。

「...誰？」

雨宮は誰が訪ねてきたか予想出来ず、徐々に動悸が激しくなっていた。そして、謎の来訪客の気配を感じ、ついに顔を合わせるようになった。

「...え!？」

雨宮の目に前に立っているのは、看護師でも見舞いに来た同僚や友人でもなかった。その人物は、彼女にとって意外な人物であった。雨宮の前に現れたのはリカであった。

「...今晚は、夜分に失礼します...」

「.....ええ...どうも今晚は！」

寝そべっていた雨宮は、驚きのあまり咄嗟に飛び起きた。リカはサングラスを掛けており、入り出待ち時のファッションスタイルであった。

「...お気遣いなく、お怪我の方は大丈夫ですか？」

「...はい.....えっと.....も...もうだいぶ...か...回復して...もうじき.....た...た...退院で...できるかと...思います...はい」

雨宮は突然のリカの見舞いで、しどろもどろな答え方をした。

「...そう、それは良かった...私に関わったことがきっかけで、酷い目に遭ったようね...御免なさい...」

リカはサングラスを外し、深々と雨宮に頭を下げた。

「や...止めて下さい！そもそも私が悪いんですから！余計なことをしたからバチが当たったんです...謝るのはこっちの方です！」

「...仕事のためにやったことでしょ？」

「...いいえ、遊び半分でやっていたかもしれません...軽はずみな行動だと分かっているながら自分が情けない...本当に勝手なことをしてすみませんでした！！」

雨宮は起き上がって、リカに土下座して何度も謝った。

「...頭を上げて下さい、全然気にしていませんから...」

「...本当ですか？」

「...ええ、慣れていきますから、ファンにも色んな方がいらっしゃるから...でも、危害を加えられたり、迷惑を掛けられたことはありません...ただ、あなたの場合、妙な匂いがした...先日、警察の人に色々と言われたと思いますが、危ない場所に無断で踏み込まないことです...」

「...はい、反省しています...」

「...ところであなたは歌劇団...お好きですか？」

「え？」

リカは、雨宮に優しく質問を投げ掛けた。

「...観劇したことは？」

「...ありません、最近興味を持って友達に誘われたりするんですが、仕事が忙しいのを理由にして、観に行くのを断ってきました...」

「...成程、興味はあるんですね、良かった.....これをどうぞ...！」

その時、リカは胸の内ポケットからある物を取り出して、雨宮に差し出した。

「...これは？」

「...今度、入団してから初のディナーショーをするんです...もし、予定がなければ来て下さい...」

「...え？これ、ディナーショーのチケット...！！そんな...こんな私に...！？」

「...今回、色々嫌な思いをさせたのでお詫びです...」

「...あ.....ありがとうございます！！必ず行きます！！」

雨宮は、サプライズに感動して涙を流していた。

「...ではお待ちしております...もう帰りますんで...お大事に...」

リカはサングラスを掛け直して、颯爽と歩いて病室を後にした。

雨宮はその姿を見て、口がぽかんと開いたままで気を失いそうになっていた。その日、彼女の血圧は異常なほど高かったそうだ。

リカは、病棟を抜けて駐車場へと入って行った。一台のシルバーカラーのクラウンが停まっており、リカはすぐさま助手席に乗り込んだ。運転席には、相棒の安藤が乗っていた。

「...彼女、元気だったか...？」

「...うん、もう退院するみたい...会わなくてよかったの？」

「また改めるよ...それに完全に俺は邪魔だろう...」

「...随分と紳士ね...あの娘はタイプだったの？」

「.....まあね、だからって追っかけはしないよ...警察がストーカーするなんて大問題だ...」

「...しつこく追っ掛けて、恋愛に発展するなんてまずないわ...」

「...言うじゃないの...お前の気障な台詞で、彼女は舞い上がってたんじゃないのか？」

「...ええ、また一人ファンが増えたみたい...」

「...ふん、これで一件落着だな、ほっとしたら腹減った...何か食って帰るか？」

「...そうね」

「...美味しいラーメン屋がある、お前も知ってるはずだ...そこに行くか...」

「あんたの奢りでしょ？」

「...割り勘に決まってるでしょうが！」

リカたちの気分は晴れ、二人は深夜まで営業している有名なラーメン屋へと向かった。ここしばらくあらゆることが巻き起こっていたが、気づけば東京公演は千秋楽日であった。その日、無事に事故もなく上演されて、リカたちの熱演で多くのファンを湧かせた。

千秋楽は、退団を決めた劇団員との別れの日でもある。退団者を送る会は涙あり、笑いありで終わろうとして、ついに次の公演でリカは退団する、彼女はついに自分の番が来たかと心の中で思った。

リカ率いる劇団員たちには、仲間の別れを惜しむ時間はなく、次の仕事が迫って来ていた。班は三つに分かれ、リカは、最初で最後のディナーショーに臨むこととなる。こうして、激動の一年の前半を終え、後半に突入しようとしており、そこにはさらなる脅威が待ち受けていた。

鳳の眼 麗人遊戯 完

鳳の眼 麗の章

<http://p.booklog.jp/book/99183>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99183>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99183>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ